

## 【論文】

## 第二次上海事変時に実施された東亜同文書院生の通訳従軍について

——原田実之手記『出蘆征雁』に基づいて——

愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員 石田 卓生

## はじめに

本稿は東亜同文書院第34期生原田実之手記（以下原田手記）をもとに1937年第二次上海事変時に実施された東亜同文書院生（以下、書院生）の通訳従軍の実態を明らかにしようとするものである。

東亜同文書院（以下、同文書院）は、1901年上海に開校した私立の高等教育機関である。中国市場をメインとした貿易を担う人材の養成を目指し、中国語と英語のほか、貿易実務に関する教育活動を展開した。1921年に旧制専門学校令の適用を受け、1939年には旧制大学に昇格したが、1945年日本敗戦によって閉校を余儀なくされている。

本稿が、1937年に行われた同文書院生の通訳従軍を扱う理由は三つある。

第一に、これについての先行研究はほとんどなく、その詳細が明らかにされていないということである。書院生の回想などで当事者が取り上げることはあっても、その具体的な事柄については一般的には知られてこなかった。

第二に、これが1943年の学徒出陣に先だっで行われた現役学生の従軍であるということである。1937年当時、高等教育機関で学ぶ書院生は徴兵が猶予されていた。法的な強制力がないにも関わらず、彼らはなぜ従軍したのだろうか。

第三は、書院生が同文書院で専門として学んでいたのが同時代の中国であったということである。中国国内にあるキャンパスで学生



図 1 軍属従軍服姿の原田実之  
（原田手記より）

生活を送る彼らにとっての中国とは、典籍を通して学ぶ観念的なものでなく、自分たちと同じ人間が生活を営んでいる中国社会そのものであった。例えば、彼らは魯迅の葬列を目撃している（引用し際には新字体を用いた。引用文中の〔 〕は筆者記。以下同様）。

寮舎の二階の窓から哀調に充ちた葬送曲を先頭に、「嗚呼魯迅先生」の弔旗を幾本となくうちたて、或いは弔意を表はした悲しみの数句を誌した布地の両端を、高々とさへ乍ら、或いはゴリキーに似た魯迅の肖像画が数名の者達に支へられて、アカシヤの上海郊外の並

木道を悲しみの騒音が十数町、あとからあとから続いて行くのみた。〔略〕涙をもつて支那の将来を予言し、訴へてみた魯迅、その魯迅を失った支那人達の隊伍の中に、頭髪もまつげも埃で真白になりながら小学生達の、疲れを大地にふみつけて今は無心に歩く姿の何と痛々しいものであつたか。<sup>1</sup>

このように生身の中国人を目の当たりにしてきた彼らは、何を考えて日中が干戈を交える戦いに従軍したのだろうか。

以上のような問題意識から、本稿は、1937年の書院生通訳従軍とはどのようなものであったのかということを書院生の立場から考察していく。

なお、本稿は原田実之の手記を通して主に書院生の立場から通訳従軍の実像に迫ろうとするものであることから、同文書院と同文会、さらに同文書院を管轄する外務省や文部省内部の動きについては詳述しないが、それについては別稿を用意したい。

## I 原田実之手記『出蘆征雁』について

『出蘆征雁』と題されている原田実之の手記（以下、原田手記）は、1937年10月29日から1938年2月27日までの従軍時の体験を記したものである。従軍中の日記などをもとに原田本人が清書したものであろう。これには多数の写真や関連文書が添付されている。次に挙げるのは添付文書の一覧である（以下原田手記添付文書）。差出人の大内は同文書院院長、岡部は同文会理事長、馬場は同文書院教

頭<sup>2</sup>である。

①大内暢三「告諭」（1937年9月3日）<sup>3</sup>  
従軍志願募集の告知文。

②大内暢三、岡部長景発、学生派遣元各府県宛文書（1937年9月3日）<sup>4</sup>  
同文書院に学生を派遣している各府県に学生の従軍について理解を求める文書。

③馬場鍬太郎発、原田実之宛文書（1937年9月3日）<sup>5</sup>  
従軍志願の事務手続きについて説明する文書。

④東亜同文会発、「軍事通訳要項」（1937年9月17日）  
従軍時の待遇を説明する文書。

⑤東亜同文書院第四学年生一同「嘆願書」（1937年10月14日）  
従軍の早期開始を求める嘆願書。

⑥馬場鍬太郎発、原田実之宛文書（1938年1月18日）  
卒業判定のために必要なレポート提出を求める文書。

⑦大内暢三発、原田実之宛文書（1938年1月31日）  
就職について兼松商店に学校推薦することを伝える文書。

<sup>1</sup> 小倉音次郎（代表）『嵐吹け吹け』、第三十四期生旅行誌編纂委員会、1938年、16-17頁。

<sup>2</sup> 1937年9月9日、6月30日付けで教頭和田喜八が辞職し、教頭代理馬場が教頭に就いている（大学史編纂委員会『東亜同文書院大学史——創立八十周年記念誌』、滬友会、1982年、148頁）。つまり、9月3日時点では馬場は教頭代理のはずだが、原田手記添付の文書では「教頭」と記されている。

<sup>3</sup> JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B05015340800（第17画像）、「2. 一般（15）第四学年生徒陸軍通訳トシテ従軍ニ関スル件 昭和十二年九月」東亜同文書院関係雑件 第四巻（H-4-3-0-2\_004）（外務省外交史料館）

<sup>4</sup> JACAR：B05015340800（第20画像）

<sup>5</sup> JACAR：B05015340800（第18-19画像）

- ⑧東亜同文書院学生課発 原田実之宛文書 (1938年2月7日)

従軍終了後の徴兵に関する事務手続きについて説明する文書。

- ⑨『丁集団参謀部第三課関係名簿 昭和十三年二月十七日於杭州』謄写版 (1938年2月17日)

- ⑩「浙江省鉱産分布図 民国23年4月浙江省立西湖博物館地質鉱産組編製 昭和13年2月丁集団参謀部第三課複写」(1938年2月)

- ⑪日本軍指揮官布告文 (時期不明)  
中国住民に対して抗日勢力の告発を求める布告文。

このうち①-③は、外務省外交史料館等で



図 2 『出征征雁』

すでに公開されているものであるが、それ以外はこれまで知られてこなかった文書である。

## II 第34期生の従軍志願動機について

書院生は何を目指して従軍を志願したのだろうか。従軍した第34期生の一人である本村弥佐一は、次のように述べている。

先づ吾々が学徒従軍を決意嘆願した理由としては(一)書院大学昇格実現と(二)書院の歴史伝統に基く九烈士諸先輩の遺志を継承して起つとの二点がその主なるものとして挙げられる。<sup>6</sup>

従軍を志願したことには二つの理由があるとしているが、一つ目について、彼は次のように説明している。

吾々が四年生に進級した前後頃であったが国内において大陸に総合大学設置の議が盛んに流布されていた。〔略〕巷間書院とは別個に検討が進められている観があった。<sup>7</sup>

この大陸での大学設置論議が具体的にどのようなものであったのかはわからないが、1935年10月に同文書院は法制関係学科設置の準備が始めており、貿易実務を専門とする商務科だけの体制から拡大していこうとしていた<sup>8</sup>。また、この時期、書院生が母校について危機感を抱かざるをえない出来事が起こっていた。第34期生が4年生に進級した1937年4月に「満洲国」では建国大学の開校が決定され、8月には学生募集が告知されたのである<sup>9</sup>。建国大学は日本ではなく「満洲国」の大学であるが、この「満洲国」は日本の傀儡

<sup>6</sup> 本村弥佐一(編)『続・嵐吹け吹け』、滬友三四期生会、1980年、276頁。

<sup>7</sup> 同注6。

<sup>8</sup> 大学史編纂委員会、前掲書、143頁。

<sup>9</sup> 宮沢恵理子『建国大学と民族協和』、風間書房、1997年、53頁。

国家と冠されるものであり、いうまでもなく日本の影響下におかれた地域である。それまで同時代の中国を専門とする唯一の日本の高等教育機関であった同文書院にとって、同じ中国大陸に登場する建国大学の存在は自身のステータスを脅かしうるものである。それによる母校の地位低下は自明のことであり、さらに書院生の卒業後のキャリアにも影響を与えるだろう。こうした状況に対して、書院生は母校の存在を何かしらの行動によってアピールする必要があると考えたのであり、その結果が通訳従軍だったのである。

二つ目は「書院の歴史伝統」の継承と実践である。その先例として挙げられている「九烈士諸先輩」とは、日清戦争での情報活動に従事した楠内友次郎、福原林平、山崎羔三郎、鐘崎三郎、藤崎秀、藤島武彦、石川伍一、大熊鵬、猪田正吉<sup>10</sup>、日露戦争での特殊工作活動に従事した沖禎介と横川省三<sup>11</sup>である。楠内、福原、鐘崎、藤崎、大熊、猪田は同文書院の前身校に位置づけられる日清貿易研究所出身者であるものの、みな同文書院の卒業生ではない。それにも関わらず「九烈士諸先輩」をあげるのは、彼らが軍人という立場でないにもかかわらず、中国で自ら危険に身をさらしたからであろう。それを範としていることから、書院生の従軍志願が中国と戦うためのものではないことがわかる。そして、同文書院の卒業生でなくとも「九烈士諸先輩」の行動は「書院の歴史伝統」の実践だといえるのである。

では、「書院の歴史伝統」とはどういったものだろうか。

前出の本村は、何のために従軍したのかということについて次のようにも述べている。

湖州は湖筆の生産で名高い街である。茲では治安維持会工作中に広東の黄浦〔埔〕の軍官学校出身の二名の中国将校が捕虜で憲兵隊に送られて来て、この取調べと情報入手の通訳に当たったが、この捕虜は兄弟で中尉と少尉の肩書きであったが、敵兵ながら流石名を負ふ軍官学校出身で気骨もあり立派な軍人であった。当初の間は口が堅く仲々〔ママ〕口を割らなかったが、寝食を共にして語り合ふ中に吾々が〔同文〕書院の学生であり、学徒従軍の目的が、東亜の保全と戦火による苦難の中国民衆の救済と将来の日中親善提携の礎石たらんとして決死嘆願の上来ていることを理解するに至って態度を一変して協力的となり取調べ及び情報の提供に応じた外吾々との親密度を頓に加えて行った。<sup>12</sup>

中国軍士官も理解を示したという従軍目的は、日中関係の正常化であり、日中提携である。しかし、書院生は中国に進攻する日本軍に従軍しているのであり、その目的と行動が一致していない。この一見すると矛盾する書院生の従軍に対する考え方はどのように形成されてきたのだろうか。それには同文書院の雰囲気の変化が大きく関わっていた。第34期生伊藤利雄は、「扱こゝで吾々の生活を最も赤裸々に反映する」<sup>13</sup>という落書きに注目し、それにより校内の雰囲気を伝えている。

入学時には「無能教授……………排斥」と言ふのが一番多かった。それが今度は二三の教授の更迭を見るや「……を引き止めろ」となつて現れた。之に類するものは後々までも見受けられた。

<sup>10</sup> 大学史編纂委員会『東亜同文書院大学史：創立八十周年記念誌』、滬友会、1982年、246頁。

<sup>11</sup> 対支功労者伝記編纂会『対支回顧録』下、対支功労者伝記編纂会、1936年、1097-1098頁。

<sup>12</sup> 本村、前掲書、306頁。

<sup>13</sup> 小倉、前掲書、355頁。

比較的穏やかな二三年生時代には雑多な方面の事が主として見られ、その反駁文が多かった。[略]「落書を禁ず、学生監（リンム）」とあつたりした。之などには「コガンコタアコセーコセスルモンガ云フト」と云つた反抗文が書き残されてゐた。「世の中には何もない、只酒と女だ」「飲ませろ」「酒だ／＼」とあつたのも此の頃であつたらう。[略]「露西亜娘の○又好からずや」とあつたり、「俺は敗惨者だ」とあると「女にか？」と付け加へる。「人生は無だ」と書いた側には「ヘン、さつつたね、バカ、オタンチン」。<sup>14</sup>

「リンム」とは鈴木中国語読みで、同文書院教員鈴木一郎のことである。彼は厳格な人物だったようで<sup>15</sup>、それを学生に揶揄されたのだろう。このように第34期生が入学してから3年生までの間の落書きとは、学校や教員に対するささやかな文句や憂さ晴らし程度の取るに足らない内容であった。恐らく現在の同世代の日本人と比べても特に変わった点はないだろう。しかし、そうした落書きが大きく変化するのである。

之が去年〔1937年1月24日〕の正月岳陽先生の御逝去<sup>16</sup>を機に著しく変化した。例へば「伝統とは何だ」「書院精神を忘れたか」と言ふのに対して「曰く言ひ難し」とあつた位で、他には並立したものは見られず「院長は何をしてるか」「伝統は失ふな、而して伝統を超越しろ」「今

の書院のザマは何だ、山洲先生が岳陽先生が地下で泣いて居られるぞ」「靖巫の為に」「身の程を知れ」と云ふ様ないかついものに代り、それらは以前の淫らな裸体画をうすく消した上にかゝれてゐるのであつた。<sup>17</sup>

「岳陽」は山田謙吉の号である。彼は二松学舎（現二松学舎大学）で漢学を修め<sup>18</sup>、同文書院で倫理及び哲学概論と漢文を教えた人物である<sup>19</sup>。「山洲」は45年の同文書院の歴史の中で20年余り院長を務めた根津一（はじめ）の号である。彼は同文書院関係者にとってカリスマであつた。学内には彼を顕彰したり、その遺訓を伝えたりしようとする山洲会や無我会、尚志会という学生団体が結成されていたし、現在でも命日である2月18日には遺徳をしのぶ集まりが催されている。そして、書院生らが言う「書院精神」や「伝統」とは、根津が同文書院で展開した教育を受け継いでいこうということを意味しているのである。

では、根津の教育とはどういうものだったのだろうか。開校時に根津が作成したとされる同文書院の「興学要旨」では、設立趣意を次のように述べている。

講中外之実学。教中日之英才。一以樹中国富强之基。一以固中日輯協之根。所期在乎保全中国。而定東亜久安之策。立宇内永和之計。<sup>20</sup>

〔中国が本来あるべき完全な状態に復興することを目的として、中国と日本の俊

<sup>14</sup> 小倉、前掲書、356-357頁。

<sup>15</sup> 戦後、鈴木は愛知大学の教授となっている。彼の愛知大学での教え子・愛知大学名誉教授今泉潤太郎は、東亜同文書院大学から愛知大学に移ってきた先輩はみな鈴木を怖がっていたと回想している（石田卓生「今泉潤太郎先生に聞く」『日中語彙研究』第7号、2018年）。

<sup>16</sup> 大学史編纂委員会、前掲書、146頁。

<sup>17</sup> 小倉、前掲書、357頁。

<sup>18</sup> 大学史編纂委員会、前掲書、265頁。

<sup>19</sup> 大学史編纂委員会、前掲書、132頁。

<sup>20</sup> 「創立東亜同文書院要領」、東亜同文書院、1901年。



英に西欧の実用的な学問を教授することによって、中国の発展と中日提携の基礎を築き、東アジアの恒久的平和と世界永遠の平和を追求する]

「教中日之英才」と述べているのは、同文書院を運営した同文会が、もともと日中両国の青年を対象に教育活動を行っていたからである。同文書院の前身校である南京同文書院(1900)には中国人の学生がいたし、中国人が日本留学をするための学校として日本国内には東京同文書院(1899-1922)が設置されていた。このように日中両国で教育活動をすることによって日中提携を目指したのである。

また、教育方針を示す同文書院の「立教綱領」では、道德教育の重要性が説かれている。

徳教為経。拋聖經賢伝而施之。智育為緯。<sup>21</sup>〔儒教の經典に基づく道德教育を経糸(たていと)とし、知識を豊にしたり技能を修得したりする教育を緯糸(よこいと)として教育活動を進める〕

ここでは教育活動が織物になぞらえられている。「経糸」は普遍的価値を具える「経書」の「経」である。通時的ということだが、さらに時流に左右されないということを意味する。「緯糸」はある一時期を表しており、共時的ということである。「経書」の解説書を「緯書」というが、主の立場にあるのは「経書」であり、「緯書」は従でしかない。つまり、知識や技能を身に付けるための教育よりも道德教育を優先しているのである。西洋諸国が植民地獲得を激しく競い合い、中国国内にまでその食指を伸ばしている状況にあって、日本はやみくもに近代化して競争に加わるのではなく、儒教的な倫理観を具えて中国との共存共栄を目指そうというのが根津の示した

教育方針なのである。根津は自ら倫理の授業を担当して陽明学のテキスト『古本大学』を講じて書院生を薫陶した。その影響を卒業生や同窓生は「書院精神」と呼んだのである。

根津は1923年に引退するが、その道德教育を受け継いだとされるのが山田である。もともと、山田は無為自然を旨とする『莊子』を好んだと伝えられており、実践を重んじる陽明学的な根津とは思想的には異なっている。しかし中国の伝統的な思想に普遍的価値を認めてこれを理解すべきであるという点において一致していた。同文書院が目指した教育は単にコミュニケーションツールとしての中国語を操ることができる貿易実務者養成に止まらず、自国をひたすら優先するのではなく、中国と向かい合ってこれを理解しようとし、また提携していこうという姿勢を育むものだったのである。

さて、同文書院の落書き観察に戻ると、山田の死によって同文書院の道德教育重視の部分にがにわかにはクローズアップされたという。これにはもちろん恩師をしのぶ感情という側面もあっただろうが、当時の状況に対する書院生故のものがきとでもいうべきものであったと考える。この時期は西安事件による国共合作によって中国国内の抗日が盛り上がり、日中関係は悪化する一方であった。これは中国を専門とする書院生にとって、日中提携を是とする母校の存在意義を損なわせるものであったし、さらに現実的な問題として卒業後のキャリアにも影響を及ぼしうるものであった。

確認しておかなければならないのは、書院生にとって日本の中国侵略とは悪しきことでしかないということである。同文書院を日本の中国侵略のためのスパイ学校と捉えるならば、中国侵略こそ目的であり、己に利することになるように見えるだろう。しかし、実際の書院生は、中国巷間の商業習慣はどのよう

<sup>21</sup> 前掲「創立東亜同文書院要領」。

なものなのか、どの地域でどのような商品の需要があるのかといった貿易実務を担うための具体的な事柄を学び、それを生かして就職しようとしていた。彼らの能力が高く評価されるのは日中が正常な貿易を進めることができる状況なのである。侵略によって日本が中国に対して一方的に優位に立ったとしても、それは日本国内の学歴ヒエラルキーが中国国内にも影響を及ぼすだけであり、同時代の中国を専門とする同文書院の独自性への評価はかえって低下せざるをえないのである。まして、軍人が幅をきかせるような状況は貿易実務を学んできた書院生のキャリア形成に有益になるどころか、学んできたものが軍事と全く関係ないものである以上は不利でしかない。そもそも、この学校と軍部には直接的な関係はなかった。根津は陸軍将校という経歴をもつが、同文書院の開校は同文会会長近衛篤磨の招請に応じて行ったのであって、軍人としての活動ではなかった。

書院生は自身の将来に悪影響を及ぼしかねない日中関係悪化という状況の中で、同文書院のシンボルである根津の道德教育を継承した山田の死を契機に母校の歴史を振り返り、日中関係正常化のために何か行動しなければならないと考えたのである。前掲の書院生の落書きには「伝統は失ふな、而して伝統を超越しろ」というものがあつた。日露戦争はもちろん、キャンパスのある上海で日中が軍事衝突した第一次上海事変においても、書院生は従軍などしたことはなかったが、第二次上海事変に始まる日中の戦争状態に直面した時、同文書院の伝統を受け継ぎつつ、それを「超越」するものとして、これまでにない従軍という行動を選んだのである。

### III 原田実之の従軍

#### 1. 従軍へ

1937年9月3日、大内院長「告諭」（前掲原田手記添付文書①）と馬場教頭の文書（原田

手記添付文書③）によって、同文書院は従軍志願を募り始めた。前者は従軍の理念を説くもので、後者は従軍に際しての事務的な手続きなどを告知するものである。次に大内院長の文書を引く。

#### 告諭

祖国大日本帝国は東亜永遠の和平を顧念し遂に挙国一致の下に皇軍を隣邦大陸の南北に派するに至れり之れ真に已むを得ざるに出づ此の秋に当り帝国臣民たるもの誰かこの債務の重大を顧ひ犠牲奉公の一念耿々たるものなからんや然るに我が忠勇義烈の将兵と雖も現地に入りては其の言語に通せず又其の地理に暗きが為め多大の不便と支障を生ずる事無きを保せず

是に於てか敢て第四学年生諸子に告ぐ、諸子は幸にして支那の現地に学び既にその言語地理人情風俗に通じ且は又我が書院の特殊課目たる支那内地大旅行をも了へたり、今日深くこの重大なる時局に鑑み須く書院創立の精神を想起し挺身奉公の至誠を致し決然立つて時艱に赴く熱烈なる意気を有せらるべきを信じて疑はず、祖国は今や切に諸子に求むる所あり、就而此際諸子にしてその長ずる所を以て或は軍事通訳に或は後方勤務に進んで出動し以て祖国に対する応分の奉公を尽されんことを切望して止まず

昭和十二年九月三日

東亜同文書院長大内暢三

文書院長之印

対象者は「大旅行」に参加した4年生である第34期生である。この「大旅行」とは書院生に課せられていたフィールドワークのことで、彼らは4-5名あるいは10名前後からなるグループに分かれて中国を中心とするアジア各地を夏休みの期間に引率者なしで調査旅

行した。例年であれば、調査を基に卒業論文に相当する「支那調査報告書」が作成されるのだが、第34期生は盧溝橋事件が突発したために旅行の中断を余儀なくされ、さらに本稿が取り上げる通訳従軍をしたことにより「支那調査報告書」を作成していない。

馬場教頭の文書には、学業半ばで従軍することになる志願者に「修業証書」なるものを出し、通常の卒業時期である1938年3月にあらかじめ卒業試験を行うことが記されている。従軍期間については明記されていないが、卒業試験をする以上はそれまでに帰還することを想定していたものと思われる。

次いで9月17日、「軍事通訳要項」（原田手記添付文書④）が出された。従軍時の待遇を通知するほか、軍からの要請があるまで待機するようという指示がなされている。

この間、上海が戦場となり9月10日<sup>22</sup>からの授業再開が絶望的となった同文書院は、書院生を自宅待機させつつ、国内での代替え施設を検討し、10月13日に長崎集合を指示、10月18日に旧長崎師範学校施設（現長崎市立桜馬場中学校）を仮校舎として授業を再開した。

しかし、従軍を志願した4年生は不満を強めていた。9月30日、海軍からの要請を受けた5名<sup>23</sup>が出発して以来、軍からの出動要請が途絶えていたからである。本村弥佐一の回想によれば、彼ら書院生は学校当局によって従軍が実質中断しているのではないかという不信感を抱き、陸軍省に代表を送り直接交渉することを決議した<sup>24</sup>。次に引くのは、その際のものとして推測される書院生の文書である（原田手記添付文書⑤）。

## 嘆願書

今次我が国ガ東洋永遠ノ平和樹立ノ為ニ南京政権以下軍閥、共産党並ビニ抗日侮日団体ノ暴虐ニ断乎膺懲ノ軍ヲ進メラレ、今ヤ尽忠報国ノ念ニ燃ユル我ガ皇軍ハ北支ニ中支ニ又南支ニ連戦連勝正ニ破竹ノ勢ヲ以テ戦果ヲ収メ居ラレルコトニ対シ满腔ノ感謝ト感激トヲ禁ジ得ザルモノデアリマス。南京政権及ビ之ヲ繞ル幾多ノ黒幕コソ誠ニ中国ヲ毒スル一大癌的存在デアリ、皇国百年ノ将来ヲ考フルトキ如何ナル犠牲ヲモ顧ミズ彼等ノ上ニ徹底的ニ正義ノ刃ヲ振ハルハハマコトニ欣快ニ堪ヘザル処デアリマス。

吾書院設立ノ趣旨亦大亜細亜主義ニ則ルモノデアリ、集フ我ガ学生ハ根津一先生ヲ始メ幾多先人ノ尊キ意志ヲ受継ギ靖臣ノ大業ニ潔ヨク殉ズベキ意気ト熱トニ燃エ遠ク波涛ヲ越エテ江南ノ学舎ニ筭ヲ負フモノデアリ従ツテ今次聖戦ノ究極目的亦吾書院ノ使命ト合致スルモノナルコトヲ堅ク信ズルモノデアリマス。

皇国ノ興亡ヲ賭スル未曾有ノ重大事ニ当リ、進ンデ此ノ榮アル聖戦ノ一端ニデモ参加スルコトハ一ニハ光輝万世ニ冠タル皇国ニ生ヲ享ケタル日本男児トシテノ本懐デアリ、一ニハ又我々書院ノ使命ヲ果ス所以ノモノデアリマス。外ニ汎ユル艱苦ヲモノトモセズ日夜御奮戦ノ皇軍ヲ思ヒ、内ニ朝野ヲアゲテノ涙グマシイ銃後ノ赤誠、遺憾ナク捧ゲラレ居ル真ノ日本ノ姿ヲ目撃スルトキ若キ血潮ニ燃ユル我々何トテ安閑トシテ日ヲ過シ得マセウゾ。

戦線ノ拡大ニ伴ヒ皇軍ノ蒙リ居ラレル不

<sup>22</sup> 大学史編纂委員会、前掲書、571頁。

<sup>23</sup> 海軍に通訳従軍した5名の中、山田忠は実家が上海にあったこともあり、8月末から上海海軍武官府の要請を受けて情報翻訳すなわち中国語文書の翻訳業務に就いている（本村、前掲書、296頁）。なお、彼は孫文の革命活動に参画した山田良政（同文書院の前身である南京同文書院教員）の弟純三郎（同文書院第1期生）の子である。

<sup>24</sup> 本村、前掲書、279-280頁。



利不便、而シテ此ノ方面ニ多少ナリトモ役立ツ通訳従軍、此レコソ我ガ書院ガ微力ナガ御奉公シ得ル処ナルヲ喜ブモノデアリ、カクテ東亜同文会ヲ通ジテノ従軍希望トナツタ次第デアリ、皇恩ト使命ノ前ニ全カヲ傾注シテ御奉公シタキ念願ノ外ニハ待遇其ノ他何等ノ希望モ条件モアリマセン。待遇其ノ他ヲ云々スルコトハ却ツテ我々ノ純情ヲ傷ツケルモノデアリマス。東亜同文会ヨリノ通訳従軍手続き通達ニ接シタトキノ我々ノ歡喜！此ノ機ヲ逸シテ又何時ノ日カ立タント我々ハ勇躍手續キヲ完了シタノデアリマシタ。心ハ既ニ戦地ニ馳セ今日カ明日カト一日千秋ノ思ヒデ待チ侘ビタ従軍命令ハ月余ノ今日、今尚来ラズシテ悶々ノ裡ニ過シテ居ル内、凶ラズモ手ニシタモノハ長崎臨時開校ノ通達デアリマシタ。コレ全ク我々ノ本意トスル処デアリマシタ。長崎ニ集ツタ我々ハ先ヅ一堂ニ集ヒ協議ノ結果茲ニ改メテ直接我々ノ心情ヲ吐露シ一日モ早く我々ノ願望ヲ容レラレ度ク嘆願スルコトニ一決シタノデアリマス。意気ト熱ト健康トニ恵マレタル我々ノ前ニハ東洋永遠ノ平和ノ為皇軍と苦難を共ニシ全カヲ尽シテ邦家ノ為ニ御奉公ノ至誠ヲ致シ靖臣ノ使命ノ為ニ殉ジ天皇陛下万歳ヲ雄叫ビシテ斃レタキ一念アルノミデアリマス。我々ニテ役立ツ処ナレバ如何ナル方面ナリトモ進ンデ参リマス。冀クバ生等ノ微衷ヲ容レラレー一日モ早く従軍セシメラレルヤウ切願シテ止ミマセン。

昭和十二年十月十四日

東亜同文書院第四学年生一同

こうした動きを制止した教員、馬場鉄太郎、鈴木沢郎、後出の福田勝蔵は同文書院卒業生であった。血気にはやった書院生たちは「書院の歴史伝統」の継承を唱えていたが、それ

をつないできたはずの先輩に対して不満を抱いたのである。あるいは先輩を批判することが「伝統の超越」と考えたのだろうか。本村は、学校当局との衝突を次のように回想している。

決議実行を学生監〔鈴木沢郎〕に訴え決意を披瀝したが依然として難色を示されたので退学処分も已むなし断乎決行する旨言明して退席し明夜十一時頃の終列車で出発する事と成った。全学生による資金カンパも終り当日午後九時頃より校庭において激励壮行会が開催され代表者の決意表明と資金カンパに対する謝辞に続いて三年生の代表から決意貫徹を期待する激励が交々訴えられ全学生長崎駅迄見送る事を決定して万才三唱と嵐吹け吹けの寮歌を合唱の後上京代表者三名〔本村弥佐一、今村鎮雄、秋本逸夫〕を先頭に整然と隊列を組み夜の長崎の街を堂々として行進して長崎駅に到着したが列車に乗込む直前になって福田〔勝蔵〕教授だったと記憶するが駅に駆けつけ同文会本部からの指示と前置きし早急に従軍実現の為善処するので一応上京を中止せよ。万一敢えて決行すれば同文会と学校との縁を切るとの申入れがあった。

事態收拾のための方便と考え激しいやりとりが交わされたが絶対に方便ではなく真実である。学生を裏切るようなことはしないと確約された。

右発言の中で同文会と学校との縁を切ると云う件は学校の消滅を意味する重大事であり、更に書院大学昇格問題も水泡に帰する結果になりかねないと言う点を重視し〔略〕学校側教授陣と全学生が対向して激論が展開され、学生側としては日限を切って実現を確約する事、万一虚言を弄して学生を裏切った場合切腹

して責任をとるかとの激烈な詰めよりも見られたが〔略〕一応納得し真夜の対決を閉じ解散した。<sup>25</sup>

陸軍省との直談判強行によって同文会が同文書院と縁を切る、すなわち同文書院が廃校になるというものや、教員の言質を取るために教員に切腹を迫ったりするなど、混乱した状況にあったようである。最後には書院生側が折れているが、それは同文書院の消滅を危惧したからであった。書院生の従軍志願理由には同文書院の存在や将来性についての危機感があったが、この陸軍省との直談判をめぐる書院生と学校当局の衝突からも、そのことが重要な意味をもっていたことがわかる。

結局、この翌日に陸軍から出動要請があり、10月25日に20名が長崎から久留米経由で任地へ、10月30日に20名が佐世保から任地へ、10月30日に19名が東京集合の後に11月5日に宇品から任地へ、11月7日に15名が長崎から任地へ、その後さらに1名が出発していった。9月30日に出発した者を含めれば80名が従軍したのである。

さて、原田実之は10月30日東京集合組の一人として従軍している。10月29日午後2時25分、宮下忠雄教授の銀行論講義の最中に呼び出され、2時45分長崎発門司行きに乗車して上京した。同文書院仮校舎から長崎駅までは2キロ、徒歩ならば30分ほどかかる距離であるが、彼らは20分もかけずに到着している。念願の従軍であり、準備万端整い、その足取りは軽かったであろう。後の悲壮感に包まれた学徒出陣とは大きく異なる姿である。

東京では、10月30日午後5時から同文会の本部がある霞山会館で大内院長、同文会理事長岡部長景、同会理事阿部信行、同津田静枝の訓示を受けて記念撮影後に午後8時まで酒

宴が催され、11月2日陸軍省で辞令を受けると午後6時からは滬友会<sup>26</sup>京浜支部主催送別会に出席するなどしているが、これから戦場に向かう切迫感はさほど感じることはできない<sup>27</sup>。この間、原田は同文会がある虎ノ門から近いとはいえない鎌倉の兄の家に泊まり、そこから東京に通っているが、11月1日は日曜日ということもあってか、丸一日を「静養」に充てている。また、11月2日「銀座ニテ頭髮ヲ落トス」と記しているが、お上りさんのような感覚で「銀座」であることを強調して記しているようにも見える。

そうした彼の上京中の出来事で注目されるのは、11月1日に参謀本部に影佐禎昭を訪ねていることである。よく知られているように影佐は陸軍における中国専門家で、当時も参謀本部内で中国に関する情報活動を担当していた。原田訪問時に影佐は不在で実際には面会していないが、陸軍中枢の人物と書院生に何かしら直接的なつながりがあったことをうかがわせる出来事である。

原田等は11月2日に陸軍省で通訳官の辞令を受けたが、特に具体的な命令は出ていなかったようで、中国に上陸するまでの旅程に緊迫した雰囲気はない。原田は11月2日夜に東京を出発したが、それは「級友数名ト共ニ西下ス」というように出動要請を受けた19名での団体行動はなく各自での行動であった。原田の場合は、その数名とも途中でいったん別れて奈良県郡山に帰省している。11月4日に神戸に到着した原田等11名は陸軍運輸部と交渉し、それによって宇品から長崎に向かうことになるが、翌日には長崎行きは中止となり、宇品から直接任地へ向かうことになった。つまり、それまではどのように中国に向かうかは全く決まっていなかったのである。11月5日午後5時、三井物産所有の葛城山丸に乗船

<sup>25</sup> 本村、前掲書、280-281頁。

<sup>26</sup> 滬友会は同文書院の同窓会組織である。

<sup>27</sup> 小倉、前掲書、305頁。

するが、翌6日に門司に着くと午後1時の出航までの合間に叔父と面会しており、軍務に就いたといっても外部と自由に連絡を取り合っていたようである。

その後2週間余りの間、東シナ海を渡って杭州湾沖合舟山群島の北端にある馬鞍列島、杭州湾北岸の金山、呉淞と移動し続けた。その船上で原田は11月5日の日本軍の杭州湾上陸を知り、さらに11月14日には「丁集団」すなわち第10軍に配属されることを報されている。しかし、それでも「今日ハ高等籠球大会、後輩ノ奮闘ヲ祈ル」（11月14日）と学生の行事について記すあたり、やはり学生気分が残っていたようにも見える。

## 2. 軍務

### (1) 南京戦

1937年11月19日、原田は中国に上陸し、第10軍司令部参謀部第3課小畑信良輜重兵中佐付きとなり、11月30日からは第10軍麾下の第18師団輜重兵第12連隊本部へ出向している。第10軍は太湖南岸から南京へと進撃したが、彼は配属先が兵站部門だったこともあって実戦は経験していない。その軍務に関する記述を見てみよう。

〔1937年11月27日 上海〕楊樹浦附近ノ良民野菜ト残飯ノ交換ニ来ル。交易所ヲ設置シテ毎朝此处デ交換スルヲニスル（岳州路消防署跡）

〔11月28日 上海〕午前九時両角少佐ト共ニ南市ニ行ク。甲兵站司令部、知覧部隊ヨリ俘虜収容所ニ行キ、彼等ノ心境、所属部隊、状況、待遇、其他ノ訊問、華軍三千ノ俘虜中ニハ佐官級ヨリ一兵卒迄！！

兵站武官ト多忙ノ日ヲ過ル。

〔12月2日 金山〕秋重少尉ト設営ノ為自

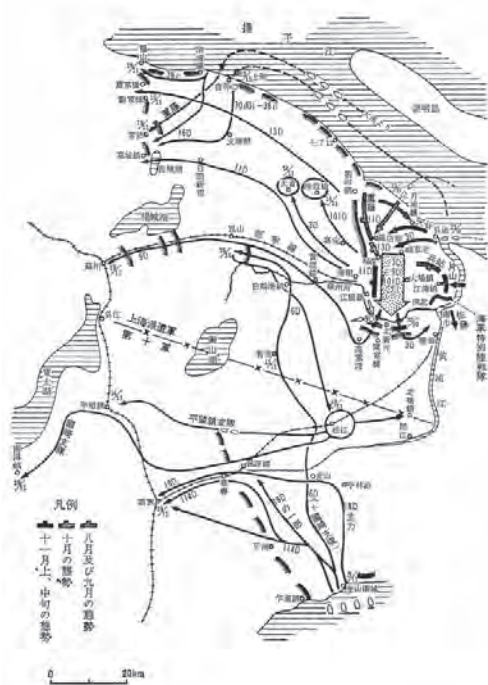


図 3 上海付近戦闘経過図 1937年10月-11月中旬  
防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 支那事变陸軍作戦』1、朝雲新聞社、1975年、400頁。

動車ニテ出発

〔12月3日 嘉興〕山崎副官〔山崎成憲少尉〕ト共ニ先行。〔略〕教会ト嘉興中学付近ニ設営治安維持会ヨリ苦力ヲ借り、道路修理ニ設営準備

〔12月4日 嘉興〕主計官、獣医官ト共ニ、軍馬、鶏ノ徴発ニ行ク。車浜ニ行キ。宣撫工作ヲナス。称シテ原田村ト使用ノ苦力ハ憲兵隊ヲ通ジ治安維持会へ。

〔12月5日 嘉興〕軍馬ニ騎乗。馬ノ徴発ニ行ク。空シク鶏ヲ得テ販ル。我々ノ徴発トハ物々交換ナリ。軍票ハ田舎ノ彼等ニハ通用シナイ。〔略〕愈々明日ハ平望鎮ニ向ケ出発スルヲニ

決ス.

人員不足ヲ補フ為苦カヲ二〇人雇用スル事ニシテ治安維持会ニ交渉ニ行ク.

[12月6日 嘉興→平望鎮] 苦カヲ連レ平望鎮向ケ進発

[12月7日 湖州] 午前五時副官ト設営ノ為湖州〔湖州〕向先行. [略] 苦カノ疲労甚シク、前途行軍不可能ナル故証明書ヲ付シ給金ヲ与へ食ヲ与へテ飯ス

[12月8日 湖州] 使用苦カハ碇泊場司令部ヲ通ジ皇軍ノ温情ヲ示シ嘉興へ返シテヤル

[12月9日] 午前八時設営ノ為先行.

[12月11日 下泗安→広徳] 徒歩 先行.

[12月12日 広徳-十字鎮→寧国] 午前三時起床. 秋重少尉ト設営ノ為自動車ニテ先発. 十字堡〔十字鎮〕迄ハ八里. 更ニ

寧国迄先行.

[12月13日 寧国] 昼食后荒木一等兵ト寧国スペイン教会ヲ訪問  
事変前ノ寧国ノ

政治経済事情  
軍備事情  
交通事情

事変勃発后

政治経済事情  
軍備特ニ防御状況.  
青壯年ノ徴発.

戦争情况.  
敵ノ退路.  
敵ノ武器

現寧国城内ノ模称等詳細ニ亙

ツテ調査. [略]

兵站ニテ寧国-蕪湖-南京間ノ道路調査.

[12月16日 寧国] 北門外ニ糧食ノ徴発調査ニ行ク.



図 4 南京攻略作戦經過要図 1937年 11月下旬-12月中旬  
防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 支那事変陸軍作戦』1、朝雲新聞社、1975年、417頁。



〔12月21日 十字鎮→広徳〕乗馬ニテ設営ノ為先発.

〔12月25日 湖州-午後四時〕午后四時埭溪鎮着

敵スパイト思ハレル男三名.  
 三回ニ亙リ、訊問・・・

このように原田の任務は、物資の現地調達や物資輸送作業員の雇用、部隊宿営地の設営準備である。戦争の悲惨さを直接的に伝えるような記述はないが、「我々ノ徴発トハ物々交換ナリ」(12月5日)と記しているのは、他の部隊では「交換」とは異なる手法が用いられていたことをほのめかしているのかもしれない。

12月13日に日本軍は南京を占領しているが、原田は南京には入っていない。後方にいた彼は、そのまま南京の南方、現在の寧国市、蕪湖市、马鞍山市付近での軍務に従事し、同月25日からは第10軍の杭州占領に従軍した。

(2) 杭州駐屯

1937年12月28日、原田は杭州に入った。雪

が舞う日だったのであろう、「三年振りニ見ル杭州薄化粧」と記している。彼は2月23日まで杭州に駐屯した。その軍務の様子を見よう。

〔1937年12月28日〕自動車ニテ先行.〔略〕相当長期ニ渡ル宿舎馬繋場ノ設営ニハ骨ガ折レル

〔12月29日〕長期駐屯第一日ハ雑務ガ多イ  
 師団通信隊員来隊司令部トノ連絡ニ当ル

〔12月30日〕連隊本部ノ管理使用人ニ証明書ヲ交付靈隠迄還ス〔略〕秋重少尉ト共ニ明日举行ノ第十軍戦勝報告祭ノ諸事打合せノ為浙江省立体育场ニ赴ク

〔12月31日〕第十軍戦勝報告祭ノ日ダ〔略〕連隊本部ヲ浙江省立体育场ノ式場ニ誘導〔略〕秋重少尉ト長期駐屯地用宿舎及ビ馬繋場ノ偵察ニ行ク

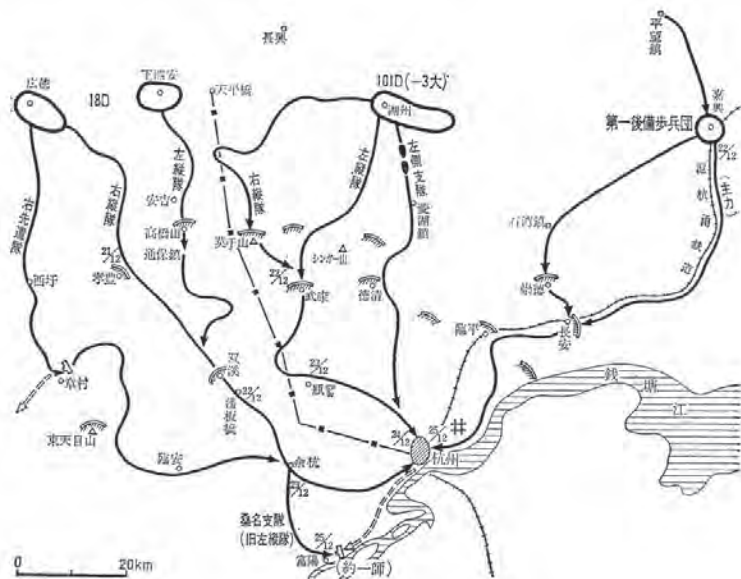


図 5 第十軍杭州作戦経過要図 1937年12月下旬  
 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 支那事変陸軍作戦』1、朝雲新聞社、1975年、430頁。

〔1938年1月2日〕馬ノ運動旁ニ馬糧徴発  
〔1月3日〕〔川内益実〕隊長ヲ岳廟、清蓮寺〔清漣寺〕、靈隠寺ニ案内

〔1月5日〕治安維持会ニ行キ明日ノ慰靈祭ノ準備交渉

〔1月7日〕錢塘江岸へ薪炭ノ輸送ニ行ク。午後觀兵式ノ予行演習。  
鄭林甫ナル華欧製糖廠々長ト連絡ヲトリ、原料ヲ提供シ、川内部隊〔第18師団輜重兵第12連隊〕専属ニ製菓サセルヲニスル

〔1月8日〕秋重少尉と馬糧徴発

〔1月9日〕不老長寿ノ菓。良山ノ鹿角ニ就テ調査〔略〕〔第18師団輜重兵第12連隊本部〕新移転先ノ偵察〔略〕隊長ニ提出ス可キ陣中日誌ノ整理

〔1月10日〕薪炭ノ輸送

〔1月11日〕新宿舎ノ整理

〔1月15日〕陣中日誌ノ整理

〔1月16日〕川内部隊〔第18師団輜重兵第12連隊〕本部ヨリ柳川部隊参謀部〔第10軍参謀部第3課〕へ復版〔略〕陣中日誌〔を第18師団輜重兵第12連隊本部に〕提出〔略〕第13碇泊場指令、山本中佐ノ案内。

〔1月17日〕陣中日誌ノ作成〔略〕谷田課

長ノ秘書役。

〔1月18日〕兵站關係諸表ノ整理

〔1月20日〕残務整理ニ平々凡々ナ多忙ナ日ガ過ギテ行ク

兵舎の準備や馬糧調達、燃料の輸送といった兵站業務を主としているものの、現地の製菓工場に「製菓サセルヲニスル」（1月7日）と緊迫感のないものもある。また、岳飛廟など杭州の名所旧跡の案内をしたり、戦勝記念行事の運営に従事したりといった雑務や「不老長寿ノ菓。良山ノ鹿角ニ就テ調査」（1月9日）<sup>28</sup>というようなことまでしており、杭州での従軍生活は極めて平穩であった。そうした日常の中で出発時の「熱烈ナル意気！！」（11月6日）は失せていったのであろう、手記は1月23日の「孤山〔孤山公園〕ニテ軍楽隊演奏」と記して中断する。彼が再び筆を執るのは1カ月後の帰国の時である。

### 3. 原田手記に記された従軍生活

#### (1) 輜重部隊

原田が配属されたのは補給を担当する輜重部隊である。日中戦争時期の輜重部隊所属者の従軍記録には江口圭一、芝原拓自編『日中戦争従軍日記 —— 一輜重兵の戦場体験』（愛知大学国研叢書1、法律文化社、1989年）として翻刻された小原孝太郎の従軍日記がある。彼は16師団の一員として原田と同じく南京戦に従軍している。

さて、当時、彼らが所属した輜重部隊は、

輜重輸卒が兵隊ならば  
蝶や蜻蛉（とんぼ）も鳥の内<sup>29</sup>

<sup>28</sup> 良山については、杭州の城門に良山門がある。鹿の角については、後藤朝太郎『支那文化の研究』（富山房、1925年）が、戦前の杭州で鹿の袋角を扱う薬局のことを紹介しているが（同書、296-300頁）、良山門周辺のことではなく清河坊のことである。

<sup>29</sup> 江口圭一、芝原拓自編『日中戦争従軍日記 —— 一輜重兵の戦場体験』愛知大学国研叢書1、法律文化

と、軍隊内で侮蔑されていた。そうした存在であった輜重兵である小原の日記について、江口圭一は次のように述べている。なお、引用文中の「輜重兵特務兵」とは、1931年に従来の「輜重輸卒」を改称したものである<sup>30</sup>。

小原氏の日記の資料的な意味での最も重要な価値の一つは〔略〕戦場における輜重兵特務兵の実態、その服務と生活のさま、その辛酸と困苦のほどを、ほとんど余すところなく、はじめて本格的に描き出していることにある。

輜重兵（科）については『輜重兵史』その他があるが、いずれも輜重兵科将校の手で、将校の観点から編纂されたり書かれたりした文献であって、輜重兵特務兵の真の声と姿を伝えるものではない。

他方で、輜重兵特務兵自身の手になる記録類も極めて少ない。軍隊と戦争をめぐる民衆の語りをひろく採集した松谷みよ子『現代民話考Ⅱ 軍隊』（立風書房、一九八五年）にも、輜重兵に関する特別の採集はない。<sup>31</sup>

江口は小原日記には「辛酸と困苦」が浮かび上がっているというが、同じ兵科の部隊にいた原田の手記にはそうしたことは見られない。これは待遇の違いが関係している。小原は輜重兵特務兵であったが、これは他の兵科の一等兵あるいは二等兵に相当するもののほとんど武装しておらず、実態は物資運搬作業員であった。それに対して原田は通訳を任ずる軍属であり、判任官待遇すなわち下士官相当の地位にあった<sup>32</sup>。彼は自ら荷役をするこ

とはなかったし、士官と行動を共にして騎乗や自動車で移動し<sup>33</sup>、時には「連隊将校ノ会食アリ」（12月24日）といった集まりに列席するなどしており、小原のような苦勞をした様子は見られない。

このように同じ時期に徴兵に応召して同じ兵科に配属され、さらに同じ南京戦の戦場にいた人物と対照してみると、原田の従軍は自ら「優遇ヲ受ケシ川内部隊」（原田手記1938年1月15日）と記しているように比較的良い待遇を受けていたように見える。

そうであるからといって、両者が描く輜重部隊が全く異なっているわけではなく、もちろん同じ内容も見ることができる。それは日本軍の補給問題に関連するものである。江口は、小原日記が記す輜重部隊について次のように述べている。

小原氏の日記には、いたるところに、輜重隊による輜重隊のための徴発や略奪が登場する。輜重隊の最も主要な兵器である馬自体が中国馬の徴発によって補充されているのである。<sup>34</sup>

原田の手記にも軍馬の消耗についての記述がある。

馬ハ道路ノ悪キト長途ノ航海ニ足ヲ痛メ、更ニ、急グ無理ナ行軍ト荷ノ過重ノ為ニ次々ニ倒レテ行ク。落伍スル軍馬ニ早く元気ニナレヨト心ヒソカニ祈ル（原田手記1937年11月30日）

原田も小原と同じように馬の徴発を行って

社、1989年、486頁。

<sup>30</sup> 江口、前掲書、482頁。

<sup>31</sup> 江口、前掲書、488頁。

<sup>32</sup> 東亜同文会発、「軍事通訳要項」、1937年9月17日（原田手記添付文書④）

<sup>33</sup> 原田手記で手段が明記されている移動を見ると、12月5、21-23日、1月2日は乗馬、11月20、24日、12月2、17日、28日は自動車ですぐと共に移動し、11月30日は自転車を使っている。

<sup>34</sup> 江口、前掲書、485頁。

おり(12月4-5日)、日本軍の輜重部隊にはよく見られた光景だったようである。

原田手記には、馬だけではなく、前掲したように中国人作業員を物資輸送のために雇用していたことが記されている。戦場で物資輸送を担うはずの部隊が、そのための馬を現地調達するだけでなく、輸送業務そのものを交戦国の国民に委託していたのである。

そうした輸送手段の不具合は、当然のことながら運搬される物資にも影響を与えていた。原田は11月30日に「飯盒炊ヲヲヤル二人分ヲ三人仲ヨク食ク」と記しており、12月1日の南京攻略命令以前においてすでに補給が滞っていたことがわかる。前線を支える後方の輜重部隊ですら食料に事欠いていたのである。

## (2) 同文書院と軍事教育

原田の従軍は比較的恵まれていたが、それは直接的には軍部と同文書院、その運営者同文会との交渉によって志願者の待遇が下士官相当とされたからである。彼らは高学歴のエリートであり、それに見合った待遇が必要とされたのであろう。しかし、後の学徒出陣とは異なり、書院生は通訳を担当する軍属であって、戦闘に加わる立場にはなかった。こうした待遇を受けることになったことには同文書院の教育も大きく影響していたと推測する。

前述したように、中国へ通訳官として赴く原田の様子には学生気分が漂っていたが、それは上陸後も同じであった。例えば、「始メテ飯盒ノ飯ヲ作り」(原田手記1937年11月20日)というの、まるでキャンプにでも来ているかのようであるし、「就床スルモ網床上ニ外套デ包ムノミニテ冷氣些カ身ニ沁ム」(原田手記11月20日)や「寒クテ眠レズ早起管理部衛兵所ニテ暖ヲトル」(原田手記11月22日)等と上陸早々に弱音を吐き、「手紙ハ胡州[湖州]ニテノ四通以来一向ニ受信セズ些カ淋シ

イ」(原田手記1938年1月8日)と寂しさをあらわにしている。ほかにも、「下給品ノバツト二箱ト交換スル氷砂糖!!煙草吸ハヌ為煙切レノ心配ハ他ノ人ヨリ少イガ、甘党ニモ悩ミハアル」(原田手記11月27日)と甘味の心配までしている。

手記は極めて私的なものであり、だからこそ本音が吐露されていると解することもできるが、筆者はやはり学生気分があらわれたものだと考える。なぜならば、第二次上海事変より前の時期に同文書院で軍事教練が実施されたことはなく、書院生は日本国内の高等教育機関在学者よりも戦争について具体的な知識を得る機会が限られており、従軍について現実的なイメージを抱くことが難しい環境にあったからである。

中等教育以上の教育機関における軍事教練は1925年の「陸軍現役将校学校配属令」によって本格化するが、同文書院では1938年1月までは行われていなかった。つまり、1937年に従軍した書院生は中学校での教練以来、軍事教育を受けていないのである。

軍事教練がなくとも、同文書院には1932年の第一次上海事変に直面したという戦争経験があるのではないかという反論があるかもしれない。しかし、戦闘が激しくなると同文書院は速やかに書院生を帰国させ、軍事活動には関わらなかった。しかも、それは上海の日本人居留民に同文書院は「只自己ノ安全ノミ計リ」<sup>35</sup>と強い反感を抱かせるものであった。次に引くのは、第一次上海事変当時、上海在住の同文書院卒業生が現地の状況を同文会に伝えるレポートである。

三月十三日午後着電

東亜同文会宛 上海同窓会幹

事

同文書院ノ引揚及其態度ハ書院ノ使命

<sup>35</sup> JACAR : B05015337300 (第18画像)、「2. 一般(36)上海事変ニ学生等内地引揚大内院長辞意表明 昭和七年三月」東亜同文書院関係雑件 第三卷(H-4-4-0-2\_003) (外務省外交史料館)



ヲ没却シタルモノトシテ当地居留民間ニ避難起リ書院ノ責任ヲ問フ事ヲ決議セリ書院ノ将来並ニ卒業生ノ就職ニ付重大ナル結果ヲ来スベシ此際釈明旁是非至急白岩<sup>36</sup>氏ノ来滬セラレン事ヲ切望ス<sup>37</sup>

上海の日本人居留民の同文書院に対する批判は極めて強かった。同文書院の上海復帰についても「開校モ困難ト思ハル状態」<sup>38</sup>となっており、大内院長の去就まで取り沙汰されている。

昭和七年三月廿七日牧田理事<sup>39</sup>宛發電  
大内〔暢三〕氏ハ多数学生ノ上海社会ノ安住ヲ希望シ只管人心ノ緩和ヲ求ムルノ意味ヲ以テ自発的ニ辞意ヲ申出ラレタ(無論近ク一時帰院サルベキモ)事甚ダ重大ナル故ニマダ理事会ニモ謀ラズ何レ貴下ノ帰京ヲ待ツテ協議スベキモ同氏ノ意志ハ固キモノ、如シ貴下限り御含ミアリタシ尚其後ノ情况ニツキ会長モ貴方ノ続報ヲ待タレ居ル 白岩<sup>40</sup>

結局、外務省の仲介もあって大内は院長職にとどまることができたが、この第一次上海事変時の同文書院への批判が、第二次上海事変における書院生通訳従軍の実施に何らかの影響を与えた可能性があるのかもしれない。

このように日本人からも戦争に非協力的と批判されるほど、もともと同文書院は軍事的な教育や活動とはかけ離れた学校だったので

あり、書院生は軍事的には全くの素人でしかなかった。例えば、軍事通訳をするといってもヘルメットを中国語で何と言うのかも知らなかった<sup>41</sup>。そうした書院生の従軍生活に学生気分があらわれるというのは自然のことであったといえよう。軍部は軍事教練が実施されていない学校で学ぶ書院生を軍事通訳の即戦力として考えることなどできなかったはずである。また、この従軍について軍側が同文書院、同文会に積極的に働きかけたような記録もない<sup>42</sup>。その姿勢は従軍を命令あるいは要請するという能動的なものではなく、志願者を受け入れるという受動的な姿勢であった。

### (3) 同文書院の大学昇格

書院生が従軍志願する動機の一つに同文書院のステータスに関する問題があった。このことは従軍中ますます重要なものとなっていた。なぜならば、上海の同文書院校舎が戦禍で失われたからである。その報せを原田は中国へ向かう船上で受け取っている。

[1937年11月8日]同文書院支那軍兵三回目  
の放火ニヨリ全焼セリト。文化機関ニ  
迄手ヲ延シたるトハ!

風飄々トシテ支那海寒シ。静ニ思フ我等  
ノ責務。

同文書院はフランス租界西側の「越界築路」地区、つまり租界の外の位置していた。日本人が集住する上海市街北の虹口地区からも離れていたため、日本軍の保護を受けていな

<sup>36</sup> 白岩龍平、当時は同文会理事長。

<sup>37</sup> JACAR : B05015337300 (第11画像)

<sup>38</sup> JACAR : B05015337300 (第18画像)

<sup>39</sup> 牧野武、同文書院第1期生、同文会理事。

<sup>40</sup> JACAR : B05015337300 (第13画像)

<sup>41</sup> 上海海軍武官府に従軍した山田忠は、上官に「鋼盔」について尋ねられたがわからず、父純三郎の友人の中国人に教えてもらっている(山田忠「第一陣従軍記」、本村、前掲書、296頁)。

<sup>42</sup> この従軍についての関係文書を綴じた外務省文書「2. 一般(15) 第四学年生徒陸軍通訳トシテ従軍ニ関スル件 昭和十二年九月」(JACAR : B05015340800)には、同文書院、同文会側から書院生を従軍させることを希望する文書はあるが、軍側からの要求や照会は全くない。

かった。中国軍による同文書院への放火は1937年11月3日夜から始まり、11月8日までに全ての施設が焼失した<sup>43</sup>。これによって同文書院の将来性が極めて不透明となったのである。その後、12月13日に同文会理事会において、上海復帰が決定されるが、それは交通大学施設を借用することによる臨時校舎の設置であって、恒久的なものではなく、新たな校舎を再建しようとするものではなかった。建国大学という脅威に対して、母校は大学昇格どころか、存続あるいは施設再建すら不透明という状況に陥ったのである。それは観念的には、書院生の従軍志願動機である同文書院の歴史、伝統、精神の継承を脅かすものであり、即事的には卒業後のキャリア形成を支える高学歴エリートというステータスを危うくするものである。このことについて原田は従軍中に同期生と話し合っている。

〔1938年1月22日 杭州〕日支事変ノ将来ノ発展、事変ノ次ニ来タル可キ問題、書院ノ将来ト教育方針、大学昇格問題、戦友ノ思出

級友田辺〔正登〕ト語り明ス  
杭州西冷飯店〔現杭州香格里拉飯店〕ノ寒空

原田が邂逅した同期生と語り合う主要な関心事は、日中関係そして母校の将来であった。同文書院のステータス問題は、もともと従軍志願の動機であり、さらに戦禍で同文書院校舎が焼失するに及び深刻さを増していたのである。原田等書院生は、従軍して国家の役立つことが母校への評価を高め、大学昇格や学校再建を助けるものになると考えたのであろう。その後の経過を見ると、同文書院は

1938年に上海に復帰し、1939年には大学に昇格しており、書院生が望んだ事の大半が実現したようにも見えるが、それについてこの通訳従軍がどのような影響を与えたのかはわからない。これに関する報道は新聞記事1つ以外は確認できず<sup>44</sup>、当時の認知度も低かったようであり、さほどの影響力はなかったのかもしれない。ただ、1943年の学徒出陣まで書院生の従軍が行われておらず、それが学生を送り出す側である同文書院、同文会、学生を受け入れる側である軍部の評価を示していると思われる。このことに関して従軍した書院生の一人志弘は次のように回想している。

……………けど昭和十二年の秋からお正月にかけての学生従軍の、あのあほらしい経験だけは今だに忘れまへん。〔略〕けど本当の兵隊になって南支那の巷埠という町で警備してたとき、そや昭和十六年の秋ごろでんな、遠い内地の陸軍省からはるばる南支那のわてらの警備隊の隊長はんに転勤して来はった、今村宗四郎という大佐のお方が「あの同文書院の通訳は役に立たなんだ」私をしり目に言はったことを考えますと、陸軍の中央では折角一所懸命になってたわてらのことを、その程度にしか思うて呉れはれんのやったかと思ひまして、あんなあほらしいこととはないと今でも思いますな。<sup>45</sup>

## おわりに

1943年に始まる学徒出陣よりも前の1937年、上海にあった同文書院の在學生が通訳として従軍した。学徒出陣が学生を徴兵し軍人としたのと異なり、書院生の従軍は通訳を担う軍属という立場であったが、1937年当時、

<sup>43</sup> 福崎峰太郎「東亜同文書院焼失に関する現状視察報告」、小倉、前掲書、298-305頁。

<sup>44</sup> 「江南に従軍の学生戦死す：同文書院の石井君」『大阪毎日新聞』1938年2月1日（JACAR：B05015340800（第24画像））

<sup>45</sup> 本村、前掲書、313頁。

高等教育機関在学者の徴兵が特権的に猶予されていたにもかかわらず、書院生は志願して戦場に赴いたのであった。

その動機は、一つに同文書院の発展のため、もう一つは同文書院が旨としてきた日中提携のためであった。前者については、同文書院が同時代の中国を専門とする唯一の学校であるという独自性に加え、さらに法律系の教育を整備することによって旧制大学昇格も視野に入れた拡大発展を目指していた最中、自身の地位を低下させかねない建国大学が設置されるという状況に対応しようとするものであった。二つ目は、初代院長であり、この学校の関係者にとってカリスマであった根津一が学校の理念とした日中提携が、根津の道德教育の後継者と見なされていた教員山田謙吉の死を契機に書院生間であらためて注目され、日中両国が戦争状態にあるという現状を打破しようとするものであった。そもそも、書院生が学んだのは中国市場をメインとする貿易実務であり、それを生かしたキャリア形成をするためには日中関係の正常化が必要であった。つまり、書院生は微視的には母校のために、巨視的には日中両国の関係正常化のために、従軍を志願したのである。そこには日本による中国侵略という視点が欠落しており、動機と行動は矛盾に満ちたものとなっているように見えるが、それは現代の目線ではない。このことについて、従軍した書院生井上侑は次のように述べている。

〔1937年〕九月、長崎の仮校舎に集った我々は、従軍通訳を志願したが、民族の自由・独立・生存を念じて日本軍の進攻に対して必死に戦った中国の学生に較べて、我々の従軍志願の動機がいかに甘かったか、まして、それが中国への侵略につながるものであったことなど、当時、

考え及ぶべくもなかった。<sup>46</sup>

こうした従軍の中で同文書院は2人の犠牲者を出した。1人は従軍した石井勝である。1938年1月23日、南京近くの蕪湖で将校に従い斥候に出たところを中国軍と遭遇し戦死した。もう1人は教員の程樸洵である。彼は早稲田大学に留学し、子息を同文書院中華学生部で学ばせたほど日本、そして同文書院に親しみ、同文書院の日中提携を目指す教育に携わってきた人物である。そのような彼にとって、わが子の同窓でもある教え子が自ら進んで祖国との戦いに従軍する現実は、あまりにも過酷だったのであろう。「想不到」すなわち思いもよらずと嘆き、そして苦悩し続けた末、1938年2月2日に長崎仮校舎で自殺している<sup>47</sup>。

そのような悲劇をもたらしたにも関わらず、書院生の従軍が軍事活動において大きな役割を果たすことは、もともと不可能であったし、実際に特記されるような成果をあげることもなかった。なぜならば、彼らはただの学生でしかなかったからである。同文書院では軍事教練は実施されておらず、書院生は軍事的な知識も技術も皆無であった。彼らは判任官すなわち下士官相当という比較的良い待遇を受けたが、それは能力を期待されたのではなく、高等教育機関在学者という高学歴エリートであったためである可能性が高い。

第二次上海事変時に実施された通訳従軍は、書院生にとって何だったのだろうか。同文書院は、従軍者を志望企業に推薦し、卒業に必要な講義のいくつかを受講していないにも関わらず、本来の卒業時期である1938年3月に卒業させた。原田は従軍中に兼松商店（現兼松）への学校推薦の通知を受け、卒業後に入社している。しかし、中には「通訳従軍の後遺症」を患い、学校が用意した就職先

<sup>46</sup> 本村、前掲書、328頁。

<sup>47</sup> 大学史編纂委員会、前掲書、593頁。

を拒んだり、虚無感に打ちひしがれたりする者もでたという<sup>48</sup>。原田は戦死者が横たわっているようないわゆる戦場に立ち入ることはなかったが、同窓の中には戦闘に参加しないまでも戦争の悲惨さを目の当たりにした者もおり<sup>49</sup>、その中には戦争後遺症と称される戦争でのストレスにさらされたことによる精神的ダメージに苦しむ者もいたのである。

最後に南京戦の最中に原田がキリスト教会を訪問した記述を見る。

〔1937年12月13日 寧国〕 昼食后荒木一等兵ト寧国スペイン教会ヲ訪問

〔略〕

夜例ノ教会ヨリ、招待アリ。

渡辺上等兵ト共ニ出掛ケル彼等宣教師間ノ連絡、宣教師ノ任務、余暇ニ何ヲナシ居ルカ、種々洞察ノ矢ヲ向ケル〔略〕

天主堂ノ牧師。



図 6 「寧国スペイン宣教師」  
(原田手記より)

彼等ハ英語ハ勿論、  
華語モ可成リ話ス。

彼等ノ主要目的ハ某国ノ諜報機関トシテノ活動デアラウ。集メラレタ各地ノ地図、写真書類、ソハ凡ソ宣教師ハ遠縁ノ物バカリ

彼等ノ語ル処信ス可キモノアリ  
信スベカラザルモノアリ。

語ルニモ耳クニモ十二分ノ注意ヲ要ス。

ここで原田は、布教とは直接結び付かない資料を所有していることを理由にして、白人の宣教師をスパイであるとしている。では、原田はどうなのだろうか。彼は日中提携を旨とし、そのために真摯に行動したが、その結果、中国を攻める日本軍に従軍しているのである。彼方からは侵略者のように見える可能性があるのではないだろうか。そして、そのことに原田自身は気づいていないのである。このことこそ同文書院通訳従軍の最大の問題なのである。さらに、これは現在の同文書院理解を難しくさせている最大の要因でもある。この学校の中国に関する教育や研究活動が精緻で克明であればあるほど、中国に密着してより理解を深めようとしていたとする理解もあれば、そこに日本の中国侵略に果たした役割を見ようとするものも出てくるのである。

### 〔翻刻〕 原田実之『出蘆征雁』

昭和十二年

十月二十九日（金）

午後二時廿五分宮下〔忠雄〕教授ノ銀行論時間ニ学生十九名。第二次陸軍通訳トシテ上京スル事ニ決定。軍刀ニ身ヲ固メ。二時四五分長崎発門司行ノ急行ニ乗り静ニ匆々トシテ上京。下関ニテ危ク午後八時卅分発ノ特急富士ニ憲兵ノ斡旋ニヨリ乗車。全ク夢ノ如キ山

<sup>48</sup> 大学史編纂委員会、前掲書、574頁。

<sup>49</sup> 例えば、井上信は「南京戦に参加して、老百姓をも巻き込んでしまう凄惨な戦争の実態を目撃して」（本村、前掲書、328頁）と回想している。



陽道東海道ヲ走ル。

十月卅日（土）

同文会幹部ノ出迎ヲ受ケ午後三時廿五分着京。直ニ陸軍省ニ出頭。補任課ニ於テ必要書類ノ提出ヲナス。午後五時ヨリ霞山会館ニ於テ大内〔暢三〕院長ノ訓辞。岡部長景理事。阿部信行大将。津田〔静枝〕中將等ノ訓辞ヲ拝シ乾杯。記念撮影。伊勢屋旅館ヨリ十一時鎌倉へ

十月卅一日（日）

鎌倉ノ兄ノ宅ニテ静養。鶴岡八幡宮ニ参詣

十一月一日（月）

早朝上京同文会ニ出頭。萩原〔七郎、同文書院第34期生〕光安〔源市、同文書院第34期生〕君ト共ニ参謀本ニ影佐〔禎昭〕大佐訪問不在ニ付田中大尉挨拶。飯鎌。

十一月二日（火）

早朝上京。銀座ニテ頭髮ヲ落シ午前十時全員揃ツテ陸軍省補任課ニ出頭。宣誓署名シテ十一月一日付ヲ以テ陸軍通訳ニ任官。辞令ヲ受ク。学生一九名ニ一般ノ正木氏ヲ加ヘ合計二十名也。陸軍省経理部ニ出頭后。同文会ニテ準備ヲ整へ。午後六時ヨリ同文会ニ於ル在京諸先輩ノ送別会ニ臨席午後九時伊勢屋旅館ニ飯ク。角帽最后ノ撮影ヲナシ軍属服ニ軍刀ヲ佩リ午後十一時ノ急行ニテ級友数名ト共ニ西下ス

十一月三日

午前十時奈良電ニテ京都ヨリ郡山ニ飯省

十一月四日

午後二時省線郡山発神戸へ。午後四時神戸後藤旅館ニ集合。〔陸軍〕運輸部。停泊〔碇泊場〕司令部ト交渉ノ結果宇品ヨリ乗船スルヲ決定。

午後九時ノ汽車ニテ西下ス同行者十一名也。

十一月五日

午後六時宇品着。運輸部ニテ後来者ト落合フ。長崎ヨリノ乗船中止シテ、三井物産所属ノ御用船葛城山丸ニ午後二時乗船。午後五時出帆〇〇ニ向フ。

十一月六日

早朝門司入港。叔父上ニ袂別記念撮影后一時出帆

江南戦線漸ク酣ナル霜月六日。家伝宝刀ヲ佩リ。三年余半ノ学究ヲ！時局重大ノ状書院創立ノ精神ヲ想起。挺身奉公ノ至誠ヲ致シ決然立ツテ時艱ニ赴ク。熱烈ナル意気！！

靖亜礎石ノ一片タル可ク。

勇躍〇〇戦線ニ向フ。

十一月五日早晩。陸軍部隊

海軍援護下ニ突如杭州湾北岸ニ上陸セルニュースヲ耳ニス

我々ハ遅レヲトリタルカ。ハヤル氣ヲ压ヘ戦線ノ進展ニ二分注意ヲ払フ。

十一月七日

天気晴朗ナレド我等ノ行先不明トハ！

十一月八日

同文書院支那軍兵三回目ノ放火ニヨリ全焼セリト。文化機関ニ迄手ヲ延シタルトハ！風飄々トシテ支那海寒シ。静ニ思フ我等ノ責務。

十一月九日

夜半馬鞍群島ニ投錨。

点滅スルモールス信号。

十一月十日

我々ノ所属ハ丁集団〔第10軍〕ト判明。直ニ同司令部宛打電スルモ状勢急転ニ依リ当分当地ニテ待機ス可シト

何タルゾ！

杭州湾上陸部隊既ニ金山ヲ占領シ楓涇鎮ヲ  
抜ケリト

月光ノ下友ト談ズ靖亜ノ経綫.

十一月十一日

暁ヲ撫シ空シク過ス馬鞍ノ一日

十一月十二日

クレイン船靖州丸蒸気船四隻下ス.

午後六時通報艦「小鷹」ヨリ金山湾ニ廻航ス  
可シトノ電信.

愈々上陸ノ時期ガ近ヅイタ. 事務長ハ我々ノ  
為ニ最后ノ乾杯ヲシテ呉レタ 荷物ヲ整理ス  
ル軍刀ノ手入ヲスル. 外ハ冷雨ソボ  
降ル霜月残月淡シ.

十一月十三日

午前三時金山沖ニ投錨停泊艦船間ニ交サレ  
ル発光信号. 残月マストニカカリ風飄々トシ  
テ晩秋. 江南ノ寒サ身ニ沁ミル. 夜明ケテ驚  
ク居並ブ朦朧!! 微カニ聞ク戦線ノ砲声. 夕  
方名取ノ側近迄廻航. 明朝〇〇ニ向テ出動ス  
可キ旨名取ノ水雷艇伝令トシテ乗船

十一月十四日

杭州湾上陸部隊嘉善ヲ抜キ昆山ニ迫ルモ  
我々ハ悶々トシテ船上ノ生活ハ続ク. 明日ハ  
上陸ダ! 故郷へ便リ. 今日ハ高等籠球大会.  
後輩ノ奮闘ヲ祈ル.

十一月十五日

午前十一時抜錨. 吳淞沖ニ向フ. 海上封鎖ノ  
皇艦. アチラニ一隻. コチラニ一隻. 海ノ守  
リハ堅シ 午後八時吳淞沖ニ仮泊.

又ヤル袂別ノ乾杯!!

杭州湾上陸部隊昆山ヲ抜キ乍浦ヲ占領.

十一月十六日

上海碼頭横付け荷役ヲ待ツ御用船八十余隻.  
上海戦線. 浦東. 南支方面ニ兵船ニ集メル夜

火.

十一月十七日

北支津浦戦線. 禹域ヲ占拠. 南上海戦線太倉  
陥落. 崑山又抜カシ嘉興ニ迫ル.

支那軍ノ敗戦ノ色全ク全面的ニ濃ク. 南京政  
府ハ軍事機関ノミを南京ニ止メ. 蒋介石自ラ  
之ヲ指揮シ他ノ政府機関ハ長沙. 漢口. 重慶  
ニ移転セリト

十一月十八日

代表者吳淞上陸. 碇泊所〔碇泊場〕司令部ニ  
連絡ニ行ク. 嘉興ノ一角陥落.

十一月十九日 上海上陸

午前十時上海ニ向ケ出帆

激戦ヲ思ハセル上海戦跡目ニ映ル. 午後二時  
浦東. N. Y. K. 碼頭〔日本郵船株式会社浦東  
埠頭〕ニテ. 下船. 二週間ニ亘ル悶々生活に  
終リヲ告ゲ葛城山乗組員一同ニ深謝. 特務艦  
八重山ノカッターニテ大連碼頭ニ上陸.

午後三時十五分公平路ニ丁集団参謀部ニ出  
頭. 小畑参謀中佐〔小畑信良輜重兵中佐〕ニ  
挨拶連絡ヲトル

「諸君ノ到着ヲ祝ス. 諸君ノ前ニ待ツモノハ  
困苦欠乏アルノミダ. 将兵ト共ニ艱難ヲ共ニ  
シテコソ戦勝出来ルノダ」乾杯.

力強キ感激励ノ言葉. 感激死報国〔万死報国〕  
ヲ期ス.

兵站部ニ連絡后. 大連湾路ト匯山路角支那煙  
草会社ニ宿営スルヲ決定.

灯火管制ノ下. コンクリートノ上ニ結ブ

上陸時一夜ハ冷々トスル.

十一月廿日上海→金山

始メテ飯盒ノ飯ヲ作り午前八時二〇分一五  
名先発隊トシテ自動車ニテ出発. 陸戦隊. 中  
山路. 杭州街道ヲ経テ午前十一時松江到着.  
松江兵站支部ニテ昼食.

午後一時徒歩ニテ黄浦江ニ出デ午後四時軍  
艦内火艇ニテ金山迄遡航. 午後五時金山碼頭

着。直ニ柳川〔平助中将〕部隊〔第10軍、丁集団〕本部ニ連絡ヲトル。

午後六時柳川部隊本部ノ宿舎ニ到着ク。管理部ニテ夕食後、直ニ就床スルモ網床上ニ外套デ包ムノミニテ冷氣些カ身ニ沁ム

十一月廿一日 金山

午前十時柳川部隊本部

今岡副官ヨリ一同ニ対シ。

柳川部隊本部付ヲ命ゼラル。余ハ脇田〔五郎、同文書院第34期生〕、田辺〔正登、同文書院第34期生〕、道下〔福四郎、同文書院第34期生〕ノ三君ト共ニ參謀部第三課付トナリ特ニ余ハ小畑參謀付トナル。

上海ニ引返ス予定ナルモ一日延期シテ明日上海ノ柳川部隊出張所ニ皈ルヲニナル。

今村、本村君ト一ヶ月振りニ会见ス

十一月廿二日 金山→上海

寒クテ眠レズ早起管理部衛兵所ニテ暖ヲトル。軍司令部ハ嘉興へ前進ノ為大混雑。午前八時山本曹長ト共ニ碇泊所司令部ニ連絡。三祐丸ニ乗船。午後三時出帆午後六時閩行ノ渡通過。午後七時半航行不能ニ付仮泊。サロンニテ足ヲカバメテ仮睡。

十一月廿三日 上海

午前六時出帆。九時上海南市。十六舖附近ニ仮泊。潮流ノ関係ニヨリ午後三時日清汽船撃沈場所ノ隘路通過。

炎々ト燃盛ル南市ヲ左ニ見テ午後四時浦東着。柳川部隊本部上海出張所ニ連絡。小畑參謀ニ挨拶。

十一月廿四日 上海

愈々勤務。早朝ヨリ、虹口、楊樹浦ヲ走廻ル。夜熊谷曹長ト共ニ灯火管制下ヲ自動車ニテ吳淞へ。「誰カ」「今日ノ合言葉ハ大砲、水雷」ト海軍歩哨ノ警戒物凄シ。

便衣隊ノ出没多ク、郊外一帶ノ夜火炎々タリ。野犬遠吠軍馬ノ死体ニ集ル群犬！！凄慘！！

小畑參謀ト第一後備歩兵団司令部ノ藤井少將訪問

十一月廿五日 上海。

戦地デ迎ヘタ亡父ノ命日

小林中佐、熊谷曹長ト上陸后始メテ入浴。

十一月廿六日 上海。

小林中佐、熊谷曹長、杉丸ニテ金山ノ柳川部隊本部へ。

十一月廿七日 上海。

楊樹浦附近ノ良民野菜ト残飯ノ交換ニ来ル。交易所ヲ設置シテ毎朝此処デ交換スルヲニスル（岳州路消防署跡）下給品ノバツト二箱ト交換スル氷砂糖！！

煙草吸ハヌヲ為煙切レノ心配ハ他ノ人ヨリ少イガ、甘党ニモ悩ミハアル。

十一月廿八日 上海。

午前九時兩角少佐ト共ニ南市ニ行ク。甲兵站司令部、知覽部隊ヨリ俘虜収容所ニ行キ、彼等ノ心境、所属部隊、状況、待遇、其他ノ訊問、華軍三千ノ俘虜中ニハ佐官級ヨリ一兵卒迄！！

兵站武官ト多忙ノ日ヲ過ル。

日支事変北支ヨリ上海ニ及ビシ

最初、即チ、大山〔勇夫海軍〕大尉事変直後、支那軍飛行機、我第三艦隊停泊艦ノ船及陸戦隊ヲ砲爆撃シタルトアルモ、巖然ト控ヘテル陸戦隊及ビ出雲ヲ始メ碇泊艦ヲ見ル時涙ガ出タ。

十一月廿九日 上海

午後三時半、小畑參謀ノ紹介ニテ輜重兵大佐川内益実氏面接。

川内部隊〔第18師団輜重兵第12連隊〕、職務上、通訳必要ナルニ付、臨時ニ柳川部隊ヨリ全隊ニ応援ニ行クヲニナル。

午後四時半、同興紡ノ川内部隊本部（18D）〔第18師団〕ニ到着キ、着任ノ挨拶ヲナス。

川内部隊本部ハ先進輜重第一、第二中隊ト共ニ明日出発予定。

上海最后ノ夜ヲ同興紡ノ歓送会ノ鋤焼ニテ元気ヲ付ケル。

明日ハ愈々出発カ

六畳ノ日本間ニ、静カニ結ブ川内部隊最初ノ夜、一人寝ハ寒ク、矢張り藁床ノゴロ寝ガ恋シイ。

余リノ優遇！明日ヨリノ活動ヲ誓フ。

十一月卅日

上海→松江

午前五時起床。隊長、副官ト朝食ヲ共ニシテ、午前七時自転車ニテ虬虹路聖廟、龍華鎮ニ出デ第一中隊長、堤少尉ノ下ニテ部隊ノ先頭ヲ進ム

上海県手前デ冷飯ヲ羊羹デ食シテ、直ニ設営ノ為前進、先行ス。

最初ノ設営予定地呉家巷ハ敗残兵ノ出沒ノ恐レアル故、之ヲ中止。松江迄前進スルヲニスル

架橋材料中隊ノ馬ハ道路ノ悪キト長途ノ航海ニ足ヲ痛メ、更ニ、急グ無理ナ行軍ト荷ノ過重ノ為ニ次々ニ倒レテ行ク。落伍スル軍馬ニ早ク元気ニナレヨト心ヒソカニ祈ル

午後六時先発隊東着。設営飯盒炊ヲヤル二人分ヲ三人仲ヨク食ク。古刹十八里ノ行軍、臀部ガ痛ミクルマル十二時藁ノ上

十二月一日

松江→金山

午前五時起床。七時半出発。

午前九時黄浦江ノ軍橋ヲ渡ル

松蔭鎮〔松隱鎮〕迄ハ難行軍。

兵、軍馬、車輛共ニ苦ム

午後二時連隊本部金山着。

復興委員会ノ□章□□タ古刹ノ和尚ノ語ルニハ！！

土間ニ敷ク筵一枚、値毛布十枚。

十二月二日

金山→楓涇鎮

午前五時起床。秋重少尉ト設営ノ為自動車ニテ出発

楓涇鎮ヨリ嘉善迄延スモ嘉喜ハ設営地ニ不適。

明日ハ嘉興迄前進スルヲニスル。

楓涇鎮一夜。

外国留学考古学者ノ夜床。

十二月三日

楓涇鎮→嘉興

午前五時半起床。山崎副官〔山崎成憲少尉〕ト共ニ先行。

ヘツドライトヲ頼リニ悪路ヲ進ム

杭州街道、設営行進。

午前八時嘉興兵站着

教会ト嘉興中学付近ニ設営治安維持会ヨリ苦カヲ借り、道路修理ニ設営準備。

久方振りノ日本酒ニグツスリ眠ル

十二月四日

嘉興

主計官、獣医官ト共ニ、軍馬、鶏ノ徴発ニ行ク。

車浜ニ行キ宣撫工作ヲナス。

称シテ原田村ト

使用ノ苦カハ憲兵隊ヲ通ジ治安維持会へ。

下痢患者続出。検便トナル。

明日ノ出発？

十二月五日

嘉興

軍馬ニ騎乗。馬ノ徴発ニ行ク。

空シク鶏ヲ得テ販ル。



我々ノ徴発トハ物々交換ナリ。  
 軍票ハ田舎ノ彼等ニハ通用シナイ。  
 始メテノ軍馬ニモ全ク自信□。  
 襲撃サレタ時ハ呑氣ニ出来ヌ。  
 愈々明日ハ平望鎮ニ向ケ出発スルヲニ決ス。  
 人員不足ヲ補フ為苦力ヲ二〇人雇用スル事  
 ニシテ治安維持会ニ交渉ニ行ク。  
 隊長病氣

十二月六日  
 嘉興→平望鎮  
 苦力ヲ連レ平望鎮向ケ進発。  
 夕刻平望鎮ヨリ南潯鎮ノ矢野少佐ノ処迄連  
 絡ニ行ク。  
 隊長不在。呑氣ニ設営。

十二月七日  
 平望鎮→胡州〔湖州〕  
 午前五時副官ト設営ノ為胡州向先行。  
 范村ノ宿泊予定地ハ不適當ナリ。  
 故ニ夜行軍ニテ、胡州迄行クヲニスル  
 胡州ニテ、柳川部隊參謀部第三課ニ連絡ヲト  
 リ、級友、脇内、道下、田辺ノ三君ニ会フ。  
 南潯鎮ヲ過ギタ第一中隊ハ旧館子〔旧館鎮〕  
 ニテ、連隊本部ハ□明ニテ、途中飯盒炊ヲヲ  
 ヤリ、休息。  
 苦力ノ疲労甚シク、前途行軍不可能ナル故証  
 明書ヲ付シ給金ヲ与へ食ヲ与へテ飯ス

老酒ニ白糖ヲ入レ沸カシタ精力湯、体ガ温ル。  
 本部ハ午后九時□明発。  
 夜行軍ニ入ル。全ノ暗黒。渡橋仲々〔ママ〕  
 容易ナラズ  
 先行ノ設営隊、懐中電灯ヲ頼リニ設営。  
 午前三時眠ル。

十二月八日  
 胡州  
 軍司令部訪問  
 使用苦力ハ碇泊場司令部ヲ通ジ皇軍ノ温情

ヲ示シ嘉興へ返シテヤル  
 各部隊付ノ級友ト久方振りニ面接シタ。  
 白倉部隊ニテ級友ノ世話ニテ入浴スル。  
 戦場百里霜白ク。  
 湖南万里風荒レテ  
 枯木ニ宿ハ鳥モナク。  
 只上弦ノ月蒼シ。

十二月九日  
 胡州→長興  
 饅頭ヲ車ニシテ、午前八時設営ノ為先行。  
 長興ニ設営スルヲニスル  
 長興丙兵站出張所ニテ光安君ニ会フ。  
 長興ノ華人、続々ト南京米ヲ田舎ニ運ブ。兵  
 站倉庫ヨリ。  
 関帝廟ニ宿営。

十二月十日  
 長興→下泗安

十二月十一日  
 下泗安→広徳  
 午前七時出發。徒歩。先行。  
 午後□時広徳着。  
 寧国ニ向ケ出發スル赤松君に遭フ。  
 広徳の清流砂上ニ体ヲ清メ野天風呂ヲ沸カ  
 シ野塵ヲ洗フ。  
 夜兵站ニ行キ、寧国迄ノ道路調査ニ行ク。

十二月十二日  
 広徳-十字堡〔十字舗、十字鎮〕→寧国  
 午前三時起床。秋重少尉ト設営ノ為自動車ニ  
 テ先発。十字堡迄ハ八里。更ニ寧国迄先行。  
 十八師団、南京攻撃ノ激戦地寧国ニ向フ。  
 正午再ビ十字堡ニ戻リ、本隊ニ合シ、中隊主  
 計ト再度寧国へ。本隊ハ十字堡ニテ飯盒炊ヲ  
 ヲナシ寧国迄十里夜行軍ヲナスヲニ決定。  
 設営隊ハ寧国ニテ宿泊。  
 本日設置サレタ兵站ニテ赤松君ニ遭フ。  
 戦地ノ汁粉又格別ナリ。

十二月十三日

寧国

午前九時本隊寧国着

夜行軍ニ疲労シ切ツタ

彼等人馬ニ与フルハ食ト暖ナリ.

昼食后荒木一等兵ト寧国スペイン教会ヲ訪問

事変前ノ寧国ノ

政治経済事情

軍備事情

交通事情

事変勃発后

政治経済事情

軍備特ニ防御状況.

青壮年ノ徴発.

戦争情況.

敵ノ退路.

敵ノ武器

現寧国城内ノ模称等詳細ニ亘ツテ

調査.

夕刻野戦病院付キノ渡辺武雄君ニ

遭フ.

兵站ニテ寧国-蕪湖-南京間ノ道

路調査.

夜例ノ教会ヨリ、招待アリ.

渡辺上等兵ト共ニ出掛ケル彼等宣教師間ノ連絡、宣教師ノ任務、余暇ニ何ヲナシ居ルカ、種々洞察ノ矢ヲ向ケル

第一中隊ハ夜行軍ニ次グニ更ニ今夜湾上鎮〔湾沚鎮〕迄夜行軍スルト云フ

軍馬ノ疲労甚シキヲ以テ中止トナル

天主堂ノ牧師.

彼等ハ英語ハ勿論、

華語モ可成リ話ス.

彼等ノ主要目的ハ某国ノ諜報機関トシテノ活動デアラウ. 集メラレタ各地ノ地図、写真書類、ソハ凡ソ宣教トハ遠縁ノ物バカリ

彼等ノ語ル処信ス可キモノアリ

信スベカラザルモノアリ.

語ルニモ耳クニモ十二分ノ注意ヲ要ス.

十二月十四日

寧国→湾上鎮→蕪湖→寧国

師団ト連絡ノ為副官及ビ秋重少尉ト共ニ先行.

湾上鎮付近ハ南京攻略終リ新ナル戦闘ノ為引返ス野重〔野戦重砲〕等デ悪路ガ更ニ悪路トナル

午前十時半、蕪湖着

牛島部隊本部（18D）ニ連絡.

「先進輜重ハ寧国、湾上鎮ノ間ニ集結、待機ス可シ」ト.

愈々〇〇攻撃ノ命令下ル.

18Dハ16日ニ蕪湖に集結. 111D〔第111師団〕ハ嘉興ニ集結} 〇〇攻撃

急ニ湾止鎮ニ引返ス.

後進輜重ノ内川大尉ト湾止鎮ニ会ス

第1. 2. 中隊ハ本日平望鎮発ニツキ胡州ニテ待機スルヲ

湾止鎮ヨリ設営ノ為寧国ニ引返

北門付近ニ設営. 本夜ハ兵站宿舍ニ休ム

十二月十五日

寧国

早朝ヨリ相当長期待機ノ設営寧国ノ街ニハ苦力ハ不居. 教会ノ華人使用ハ防諜上不可ナリ.

午后十一時五〇分、敵襲アリ.

寧国南門付近ヨリ西門ニカケテ、即チ、第一中隊馬繫場目標ニ敵襲アリ

特務兵夜間演習デチト騒ギ.

十二月十六日

寧国

入浴後、北門外ニ糧食ノ徴発調査ニ行ク.

十二月十七日

寧国

副官自動車ニテ胡州ノ隊長ノ処迄  
秋重少尉ト宣撫傍ラ馬糧ノ調査ノ為田舎ニ  
出掛ケル  
全然弾痕ナキト一チカアリ。又全然、痕跡ナ  
キ迄ニヤラレタト一チカアリ。

十二月十八日

寧国

北門糧食庫ヲ襲撃シテ来ル敵兵ハ夜毎々々  
放火ヲナス

急激ニ寒ク、小雪トナル

病氣中ナリシ第2中隊長伊藤少尉出迎ヘノ為  
東門ニ連絡ノ為赴キシ{今橋伍長今村伍長}  
敗残兵ノ為東門東方八〇〇米、鉄路付近ノ露  
ト散ル時ニ午後七時午後八時警備隊討伐ニ  
向フ。

南京陥落后兵站線ヲ狙フ敗残兵ノ蠢動スル  
事ヨ。

十二月十九日

寧国

故今村、今橋両伍長ノ死体、南門付近ニテ火  
葬ニス

明日ハ出発カ。級友ハ続々通過シテユク。残  
ルハ第五通団ノミ。

十二月廿日

寧国→十字舖〔十字鎮〕

午前〇時頃夜襲アリ。北門付近ナリ。

午前七時出発。乗馬。

午後四時十字舖着。三叉路ヲ漂水ノ方曲ツタ  
処ニテ露營。本部ハ長口曹長ノ外ハ特務兵九  
人ニ銃二挺。心細キ次第ナリ。夜襲ノ多キ十  
六舖。武装シタ倭軍刀ヲ握リ眠ル。

中隊ニハドラ\／焚火ヲサセ百万ノ大軍ニ見  
セカケル

十二月廿一日

十字舖→広徳

敵襲モナク過ギタ朝七時出発。

乗馬ニテ設営ノ為先発。

警備隊ノ側ニ設営。

午後〇時半、十字堡ニ敵襲アリタル為応援。  
討伐ノ為、広徳警備隊林隊ノ白樺隊ハ十字堡  
向ツテトラックで飛ンデ行ク。

無事返還ヲ祈ル

歩兵砲、迫撃砲、野砲ノ銃砲声殷々ト耳〔聞〕  
ユ。

我々ノ出発后5D〔第5師団〕ノ輜重ヲ襲ツタ  
正規〇〇軍、頑強ニ攻撃シテ来ルラシイ

十二月廿二日

広徳→太平橋

午前六時、残月ヲ背ニ出発。

午前十一時下泗安通過。

乗馬ニテ先行。敵襲ヲヨソニ連絡上グラ\／  
飛ス。

午後三時太平橋着。

長興-広徳間ハ敗残兵ノ出没頻々タリ。警戒  
モ厳重。

十二月廿三日

太平橋→胡州

火災ノ為跳起キル。午前四時半出発。

小雨ソボ降ルモ暖ク。

午前八時長興着。第3. 4. 中隊ト合ス。

途中川内隊長ニ遭フ 乗馬ニテ前進。

午前十一時第四中隊襲撃ヲ受ク。

午後四時雨中ヲ胡州着。

柳川部隊本部第三課ニ小畑参謀ヲ訪フ。

萩原、田辺、脇内ノ三君ト会フ。

十二月廿四日

湖州

午後参謀部第三課ニ飯ル。

輜重隊ハ暫ク待機ス可シト。

連隊将校ノ会食アリ。

杭州攻撃開始！！

十二月廿五日

湖州-埭溪鎮

午前八時出發.

菁山站ニテ大休止.

敗残兵ノ討伐

午後四時埭溪鎮着

敵スパイト思ハレル男三名.

三回ニ亙リ、訊問……

第一線歩兵隊杭州ニ入城

十二月廿六日

埭溪鎮→上栢鎮

午前七時出發.

武庫ニテ休止.

杭州入城部隊多ク、前進不可能ニツキ野重〔野戦重砲〕ノ後デ上栢鎮ニ一泊スル事ニスル

部隊長ハ師団司令部ニ連絡ノ為杭州へ.

十二月廿七日

上栢鎮→瓶窰鎮

午前八時半出發.

午後二時瓶窰鎮着

敗敵付近ニ多ク、警戒厳ナルヲ要ス可シ.

柳川部隊本部、本日杭州へ向フ.

十二月廿八日

瓶窰鎮→杭州

午前八時自動車ニテ先行.

雪ニモメゲズ杭州ヲ望ンデ何レモ元気.

野戦重砲、全輜重隊、衛生隊、師団輜重、第三戦レ野病院、馬廠等続々ト入城

三年振りニ見ル杭州薄化粧.

十二月廿八日. 18D.

宮崎部隊激戦地

午前九時半、杭州大華飯店ニ師団司令部ヲ訪フ.

先輩土屋通訳官〔土屋弥之助、同文書院第25期生〕ニ会フ.

十月廿九日午後二時四三分.

長崎駅頭

「又戦地デ会ワウ」

ノ日ガ二ヶ月后ノ今日懐シキ限りナリ.

相当長期ニ渡ル宿舍馬繫場ノ設営ニハ骨ガ折レル

十二月廿九日

杭州

長期駐屯第一日ハ雑務ガ多イ.

師団通信隊員来隊司令部トノ連絡ニ当ル

挙動不審華人数.

放火犯人ノ潜入多ク、不断ノ注意警戒ヲ要ス.

藤君ト語ハ憂悶ノ談.

十二月卅日

杭州

連隊本部ノ管理使用人ニ証明書ヲ交付靈隠迄還ス

午前九時半、秋重少尉ト共ニ明日举行ノ第十軍戦勝報告祭ノ諸事打合せノ為浙江省立体育场ニ赴ク.

第一中隊ハ本日餅搗ヲナス.

師団ノ歩55連隊ノ右翼先遣隊広徳ヲ出デテヨリ激戦中.

桑名〔照式?〕旅団富陽付近ニテ激戦中.

右翼先遣隊ノ安全且有効ナル戦勝ヲ祈ル

昭和十二年十二月卅一日

杭州

昭和十二年、大晦日ヲ戦地杭州デ迎ヘ昭和十二年ハ杭州デ総決算ヲナストハ思ヒモヨラス!!

第十軍戦勝報告祭ノ日ダ

午前十時連隊本部ヲ浙江省立体育场ノ式場ニ誘導

午後秋重少尉ト長期駐屯用宿舍及ビ馬繫場ノ偵察ニ行ク.

目モアテラレヌ国立浙江大学ノ廢墟

十分設置サレタ高射砲陣地ト防空壕.

昭和十二年度ノ戦塵ヲ杭州河坊街ノ胡同ダ流落シ久方振りノ長鬚ヲ落ス



夜ハ隊長、内川大尉ニ年末ノ挨拶  
 午後六時連隊本部餅搗開始。  
 寧国ヨリ持来リシ七升ノ糯米。  
 衛兵所前ニ建テラレタ門松  
 戦地ノ迎春準備全ク完了。  
 杭州城内外ノ敗残兵盛ニ出沒。  
 単独行動ハ絶対禁止。  
 上海-杭州間ノ鉄道ハ鉄道隊ノ不眠不休ノ復  
 旧作業ト本輜重隊ノ絶大ナル援助ニ依リ  
 残り一、〇〇〇米ニテ完全復旧スル事ニナル  
 応援ニ行キシ輜重隊夕刻濡鼠トナリ皈隊

昭和十二年回顧

於杭州河坊街川内部隊本部。  
 誠ニ多事多難ノ一ケ年。  
 先ヅ帝国ヲ省ルニ政変相次ギ遂ニ六月近衛  
 内閣ノ出現トナリ、日支ノ大問題解決ス可ク  
 乗出シ、盧溝橋事変ニ次ギ上海事件、次デ丁  
 集团ノ歴史的杭州湾敵前上陸、敵首都南京ノ  
 陥落続イテ杭州入城トナリ。茲ニ聖戦半ケ年、  
 暴支膺懲ノ第一次段落ヲ見ル  
 二〇億ノ臨時軍事費易々賭シテ予算通過。国  
 内次第ニ協心同力困難ニ向ツテ邁進スルノ  
 機至リ。八月末ニハ国家総動員運動起ル 举  
 国一致ノ実次第ニ顕著トナル  
 外極東ノ風雲急ヲ告ゲタルハ勿論ノヲ、欧州  
 地中海ノ空気險悪、英仏独伊露ニ西班牙ヲ繞  
 ル国際関係ハ微妙ニ動イタ

全文書院ハ不幸第三次兵燹ニ罹リ、十月十三  
 日長崎市ノ臨時開校、四年級ノ通訳従軍志  
 願！！友人ノ出征、幸ヒ本日迄戦死者無シ  
 余幸カ不幸カ、本日迄健在、乞フ、我ニ与フ  
 ルニ至難至大ノ仕事ヲ 与以テセラレヨ。

昭和十三年 迎戦勝新年

思ハザリキ、此ノ地ニ此春ヲ迎ヘントハ  
 皇運ノ日ニ盛ナル斯ノ如シ。

一月一日

午前七時隊長ニ新年ノ挨拶。  
 午前八時、新年屠蘇ノ祝。  
 午前十時、新年拝賀式  
 東方遙拝、聖寿万才ヲ叫ビ皇国ノ隆昌ヲ祈リ  
 シ時ノ新鮮ナル無量ノ感！！  
 「乱ニ居テ乱ヲ忘レル勿カレ」  
 連隊長訓示  
 馬糧ハ輜重隊ノ活動ノ源泉ナリ。

一月二日 杭州

午前八時秋重少尉指揮。  
 馬ノ運動旁ニ馬糧徴発。  
 杭州陣地中迎春見物  
 三年振りニ見ル西湖の真面目  
 各乗馬隊ハ来ル可キ戦闘ニ備ヘル為軍馬ノ  
 運動。  
 西湖-岳王廟-清蓮寺〔清漣寺〕→皈隊。

古賀第四中隊

山口少尉ノ指揮スルーケ小隊  
 太田特務兵ノ錢塘江ニ於ル、敵兵生捕リ水中  
 ノ奮戦アリ。  
 本日試験的ニ電灯ツク。  
 杭州発電所ノ一部復旧。

一月三日 杭州

隊長ト共ニ軍司令部訪問。  
 小畑参謀及谷岡第三課長ニ新年ノ挨拶ヲナ  
 ス  
 落着シタ軍司令部。  
 隊長ヲ岳廟、清蓮寺〔清漣寺〕、靈隱寺ニ案  
 内。  
 夜、清蓮寺〔清漣寺〕魚樂園ノ鯉ヲ食ス。

一月四日 杭州

御前九時本部ニテ  
 勅語下賜記念式ヲ挙行ス  
 丙兵站司令部ニテ本日ヨリ同盟ニュース発  
 表。

一月五日 杭州。  
治安維持会ニ行キ明日ノ慰霊祭ノ準備交渉。

一月六日 杭州。  
浙江省立体育場ニテ午後二時ヨリ十八師団  
関係戦没者慰霊祭執行。

一月七日 杭州。  
錢塘江岸へ薪炭ノ輸送ニ行ク。  
午後觀兵式ノ予行演習。  
鄭林甫ナル華歐製糖廠々長ト連絡ヲトリ、原  
料ヲ提供シ、川内部隊専属ニ製菓サセルヲニ  
スル

一月八日 杭州  
華人ヲ如何ニシテ復業サセルカ。  
原料ヲ提供シテ製菓サセルヲ之モ良法ナシ。  
午後秋重少尉ト馬糧徴発。  
夜始メテ、ライオン会社ノ慰問袋到着ス。  
手紙ハ胡州ニテノ四通以来一向ニ受信セズ  
些カ淋シイ。

一月九日 杭州  
不老長寿ノ菓。艮山ノ鹿角ニ就テ調査。  
軍司令部ニ赴キシ処上海方面ノ宣撫工作多  
忙ニツキ近日中二十八師団ヲ引揚ゲ軍司令  
部ニ販還ス可シト  
新移転先ノ偵察。  
隊長ニ提出ス可キ陣中日誌ノ整理。

一月十日 杭州  
114i〔歩兵第114連隊〕佐々木隊本部ノ跡ヲ引  
継ギ、之ヲ川内部隊本部ト決定スル  
午後薪炭ノ輸送。  
軍司令部ヨリ至急販還ス可シトの事。

一月十一日 杭州  
觀兵式ハ中止、軍客検査ヲ挙行。  
新宿舍ノ整理。  
十八師団徴発ニ関シテ、隊長会議開催。

新宿舍、川崎部隊（小堺部隊第Ⅱ大隊）本部  
跡ニ変更

一月十三日 杭州。  
拱宸橋ニ海軍砲艇隊来杭。  
自分ハ愈々十六日朝軍司令部ニ復販ス可シ  
ト

一月十四日 杭州。  
本部ハ本日急ニ川崎部隊付ニ移転スルヲニ  
ナツタ  
立花君ノ努力ニ依リ通訳室ハ三階中央。  
冥想ニ耽ル新居大寒ノ夜。

一月十五日 杭州。  
川内部隊最后ノ日  
新本部ハ本朝食ヨリ会食。  
陣中日誌ノ整理。  
優遇ヲ受ケシ川内部隊。

一月十六日。杭州。  
川内部隊本部ヨリ  
柳川部隊參謀部へ復販。  
朝食后隊長ニ挨拶。  
陣中日誌提出  
服務中ノ懇切ナル指導ヲ深謝  
午前十時柳川部隊參三課ニ復販。  
午後第13碇泊場司令、山本中佐ノ案内。  
久方振りニ級友田辺君ト全室ニテ語々

一月十七日 杭州。  
陣中日誌ノ作製。訂正デ參謀部第三課ハ大混  
雑  
谷田課長〔谷田勇工兵大佐〕ノ秘書役。

一月十八日 杭州。  
兵站関係諸表ノ整理。  
金子參謀〔金子倫介歩兵太尉〕内地販還ノ為  
瀬川少佐ノ引継ギ忙殺。

一月十九日

杭州

参謀部第三課宴会

於迎紫街聚豊園

自 午後六時.

瀬川少佐、

熊谷、松本、山本三曹長、

福島、田辺、原田通訳

一步ヲ踏出サントス.

保叔塔〔保俶塔〕ニ耳ク、杭州ノ盛衰

川内部隊長来課.

福地君来課

〔写真キャプション〕 一月廿三日

孤山〔孤山公園〕ニテ軍楽隊演奏.

一月廿日

杭州

残務整理ニ平々凡々ナ多忙ナ日ガ過ギテ行ク.

毎日陰鬱ナ日ガ続ク.

陣中熊谷曹長ハ囲碁

〔写真キャプション〕 西湖遊記 一三・二・廿二

山丸一等兵 福島通訳 田辺通訳 熊谷曹長 山本曹長 ロスマン

〔写真キャプション〕 於中支兵站監部本部前  
昭13. 2. 26

一月廿一日

杭州

金子参謀陸軍省ニ栄転決定.

瀬川少佐ノ秘書

〔写真キャプション〕 柳川部隊本部

昭和13年2月23日杭州發凱旋

嘉興站ニテ大休止

一月廿二日

杭州

川内部隊本部、山崎副官来課.

金子参謀ト袂別ノ紀念撮影

田辺君ト管理部ニ萩原君訪問

戦塵ノ上海ヲ出ル

昭一三・二・廿七日

長崎丸

13. 2. 27

〔写真キャプション〕 上海匯山碼頭

日支事変ノ将来ノ發展、事変ノ次ニ来タル可キ問題、書院ノ将来ト教育方針、大学昇格問題、戦友ノ思出

級友田辺ト語り明ス

杭州西冷飯店〔杭州香

格里拉飯店〕ノ寒空

13. 2. 27

〔写真キャプション〕 上海匯山碼頭

一月廿三日

杭州

金子参謀総長出發、陸軍省資源局へ

日出前ノ西湖ノ景觀、平和ノ暁光トハ。

浅靄ニ浮ブ湖心亭.

杭州何百年ノ夢ハ破レ、今新ナル更正生活ノ